同志社ミステリ研究会

2015 年度　前期

かくれおん傑作選

目次

3	固ゆで玉は手を汚さない 保良吹世　～「固ゆでたま号」より
7	死が二人を分かつまで 森煮豆仁　～「固ゆでたま号」より
19	G船上の犬たち 八場置氏　～「赤信号」より
24	鹿野師実のアンフェアなランチタイム 小浜百　～「黒のロングコート号」より
30	霧消する小屋 蒼田雅翠　～「お花見号」より
36	冷たい夏 望月佳司　～「黒のロングコート号」より
38	作者コメント

固ゆで卵は手を汚さない

保良 吹世

人間は誰しも最初は卵の殻をケツに付けたひよっこだが、臨終の際まで殻をくっつけているのは珍しい。そんな稀有な存在、とある大富豪はヒューストン郊外の屋敷で固ゆで卵に殺された。死因は窒息死。享年１０８歳だった。

さて、被害者がいくら高齢で、生前から既にポックリ秒読み状態であったとしても今回の件には事件性がある。遺族もドタバタ臨終で済ませたいところだろうが、犯罪の片鱗が現場に垣間見える限り警察はきちんと捜査しなければならない。

そんな経緯で億劫ながらも、茶色にくたびれたコートを羽織った全体的にくたくたの男――スコッチ刑事は、被害者の屋敷に聞き込みにやって来たのだった。

「すまない、ウィリー・スミスという男に話を聞きたいんだが」

スコッチ刑事は屋敷の玄関で下女に声を掛けると、使い込まれて革の隅が擦り切れたまくった警察手帳を提示した。幸いなことに事件の容疑者はたった一人にまで絞り込まれており、その容疑者と近しい人物は数えるほどしかいなかった。その中の一人の名前を下女に告げると彼女は素直に頷いて、スコッチ刑事を男のもとに案内してくれる。長いおさげの下女はまだ若く、少女と表現しても良い年頃のように見えた。

スコッチ刑事が少女に案内されたのは、広々とした屋敷の厨房だった。つんと鼻をつく香辛料の匂いと、ステンレス製の棚に顔を並べた調理器具。清潔で整頓されているはずなのに、どこか雑然とした印象の空間であるが、豪邸の調理場としては十分すぎる程にふさわしい。男やもめには馴染みが無いな、と刑事はひそかに胸の内で呟いて、さて、厨房をぐるりと見回した。

スコッチ刑事は下女に軽く礼を伝えてから、おもむろに「おーい！」と厨房の奥に向かって声を張り上げる。数秒間の静寂。しばらく待ってみると突然、どんがらがっしゃん、と金属製品が慌ただしく床に落下する音が響いてきた。耳障りな音だ。刑事が顔を顰めたのもつかの間、場違いなほどに明るい声が厨房の奥から反響してくる。

「はいはーい！　ちょっと待っててくださいねー！」

スコッチ刑事が大人しく厨房の入り口で待っていると、やがて棚の裏側から赤毛の男がひょっこりと顔を出した。顔面にそばかすが散った、ひょろりと背の高い青年だ。彼はスコッチ刑事を視界に捉えるとパッと表情を明るくして、エプロンで手を拭いながら「わあ、どうもどうも、」と満面の笑みで近寄ってきた。殺人事件が起こった屋敷には似つかわしくない、底抜けな朗らかさだった。

「初めまして。貴方が昨晩、電話をくださった刑事さんですよね？」

「ああ、ヒューストン市警のスコッチだ。今回はご協力、感謝する」

「わあっ、本物の刑事っぽい！　格好良いなぁ！　……あ、申し遅れました。僕はこの屋敷の厨房手伝いをしている、ウィルっていいます。どうぞよろしく！」

人好きのしそうな面立ちを喜色で彩りながら、ウィル青年は憧憬の眼差しでスコッチ刑事に向けてくる。青年のあんまりな能天気さに、スコッチ刑事はこめかみを指で押さえていた。主人が死んだというのに、まったく緊張感が無い。わざと不謹慎に振る舞っている、と思いたい。そうでなければ彼の頭はスカスカだ。打算はないが思慮もない、捜査の協力者としては一番鬱陶しいタイプ。

面倒かもしれないな、とウィル青年を眺めていると、何を勘違いしたのか彼は照れくさそうにウィンクをしてきた。スコッチ刑事は頭を抱える。ひょっとして彼への聞き込み捜査は俺にとって骨折り損の、大仕事になってしまうのではないか？　――中年刑事は己のそんな予感に、そっと蓋をした。

「……ところで、君のお師匠について話を聞きたいんだが」

「ああ、エール親父のことですね！　頑固で偏屈だったんですけど料理の腕はピカイチ、余ったチーズを僕と野良犬に分けてくれる良い親父でした。いやぁ、惜しい人をなくした！」

「いや、彼はまだ生きているんだが……うちの留置所で」

まさか事態を理解してないのではあるまいか、と刑事が戦々恐々としながら付け加えると「無論、知ってますとも！」とウィル青年がけらけらと歯を見せて笑う。彼はスコッチ刑事が冗談を言ったと思っているらしかった。

「でも、僕ってばただの下男なので、ちっとも事件の状況を教えてもらえてないんですよ。あの朝、警察に電話したのは僕だっていうのに！」

「ああ……ヒューストン署史上、最も要領を得ない通報だったと聞いていたが、あれは君だったのか」

「いやぁ、お恥ずかしい。目の前で人間が毒殺されたのなんて初めて見たもんですから、気が動転しちゃったんですよ、僕。受話器を握ったまま、げえげえ吐いちゃいました」
「それはご苦労だったな。しかし正確には、被害者の死因は毒物ではないぞ」
刑事の言葉に、ウィル青年はエッと瞠目する。まあ、そう勘違いするのも無理はないだろう。富豪を死に至らしめたきっかけの一つは、確かに毒物であったのだから。
事件が発生したのは数日前、先週の月曜日のことだ。当日の朝、自分の屋敷で目を覚ました被害者はまず下女を呼びつけ、朝食の用意をするように申しつけた。承った下女はそのまま厨房に向かい、コックである容疑者にその旨を伝える。
容疑者はあらかじめホウレン草のソテーと、ゆで卵を積んだバスケットを準備していた。容疑者は下女にソテーの皿とフォーク等を、ちょうど厨房に出勤してきた下男にゆで卵とオレンジジュースを手渡して、被害者の元へ配膳するように指示を出す。なお、この様子は他の使用人にも目撃されており、配膳をした二人はずっと両手が塞がっていたことが証明されている。
また、下女は被害者に呼び出されるまで屋敷の掃除をしており、下男は厨房に駆け込む直前まで使用人部屋で寝ていたことが同室の男から確認されたため、配膳を言い渡される前の彼らが厨房に出向いて何かしらの細工を施した可能性は低いことも付け加えておく。
さて、配膳を任された下女と下男は料理を零すことなく、無事に主人の部屋まで届けることが出来た。朝食を並べ終えた二人は壁際で待機し、被害者はゆで卵の殻を剥いて、そして――
「僕、ちびっちゃうかと思いましたよ。だって、ゆで卵を食べた途端、旦那様が胸を掻き毟ってのたうち回るんだもの！　白目むいて、床中ゲロ塗れにして……掃除が大変そうでしたね」
顔を顰めながら、ウィル青年は当日のことを以上のように証言した。下女と共に被害者の朝食を運び、泡を食って警察に通報した下男こそが彼である。ここまでの話は、一度目の聞き取り調査で既にわかっていたことだった。
「でも、あれが毒殺でないなら何なんですか？　呪殺？」
「窒息死だ。毒物の摂取による嘔吐で、吐瀉物を喉に詰まらせたんだ。無論、きっかけはゆで卵に仕込まれた毒物であるし、事故ではなく殺人として扱うことになったが……」
「ふんふん……ん？　あれ？　ちょっと待ってください」
わかったような顔をしていたウィル青年は眉間に皺を寄せて、首を傾げた。怪訝そうな、腑に落ちないような表情を浮かべて「あの、スコッチ刑事」と頭を掻く。
「その毒物って、ゆで卵の中から発見されたんですよね？　僕が運んだ卵のひとつから」
「ああ、間違いない」
「でも……それじゃあ、それじゃあおかしいですよ」
スコッチ刑事も神妙な顔で頷く。どうやら、彼も我が署が直面している難題に辿り着いたようだ。
被害者の死因ははっきりしており、証言者の数は1ダース以上。容疑者は既に確保されて、彼の自宅から件の卵と同じ成分の毒物が入った小瓶が発見された。非常に簡潔明瞭。三時間で判決が出そうな単純な事件。しかし、ある問題が川の流れを滞らせる岩のように存在している。スコッチ刑事は科学捜査官の困窮しきった顔を思い出した。渡された報告書の、奇妙な箇所。毒物はゆで卵の内側のみから検出された、という一文。
「いったいどうやって、エール親父は傷ひとつない固ゆで卵に毒物を仕込んだんでしょうね？」

「僕、ちゃんと卵を見ましたよ！　いつもは殻を剥くように指示されるのに、今朝はされなかったから、不思議だなあって。実際、旦那様にも何で剥いてないのかって怒られちゃいましたし。……その僕が誓って言いますけれど、ゆで卵にはヒビも、注射器を差し込んだような穴もありませんでした！　間違いなく、無傷でしたよ！」
「ああ、それについては疑っていない。すでにこちらでも調べがついている」
事件が発生した当日、ヒューストン署の科捜研は夜を徹してゆで卵の殻を復元していた。被害者は相当ゆで卵の殻を剥くのが下手だったらしく、癒着した薄膜や粉砕された欠片から元の卵型に戻った時には拍手喝采の騒ぎだったそう

だ。だが、復元された卵を調べ始めた科捜研の面々は、やがて青ざめる事となる。卵の殻には注射針の痕も、傷も、毒物の侵入経路と思しきものが何も見つからなかったからだ。
「それにしても、わざわざ事件当日にだけ殻つきのゆで卵を出すだなんて……警察に対する挑戦ですかね。エール親父、痺れますね」
「……ちなみに、ゆで卵が食事に出されていた頻度は？」
「毎食です」
けろりとウィル青年は言い放った。朝、昼、晩……旦那様は動物性タンパク質の摂取を、すべてゆで卵で済ませていました、と。
「エール親父はこの屋敷に来る前は、それはそれは有名な料理人だったんですけど……この屋敷の厨房では、肉や魚を調理しているところを見たところが無いんですよ。ずっとゆで卵と、野菜です」
「味気ないな……被害者は、そんなに卵が好きだったのか」
「いえ、別に」
ウィル青年はかぶりを振りながら「親父もそう思ったらしくて『随分と卵にご執心ですね、旦那様？』って訊いたことがあるんですよねー」と笑う。おそらく、彼は容疑者のそれが質問ではなく嫌味だということに気付いていない。
「で、旦那様はしれっと、こう答えたわけですよ。こっちの方を見向きもしないで」
「……被害者は何て答えたんだ？」
「『手が汚れないからだ』、って」
「……」
「あの食事への頓着の無さからすると、エール親父を雇い入れたのも金持ちの見栄だったんでしょうね。勿体ないなぁ」
親父もさっさと辞めちゃえばよかったのに、とウィル青年が同情するようにぼやく。容疑者がこの屋敷を辞めるわけにはいかなかった、のっぴきならない金銭トラブルについてスコッチ刑事は事前に調べていたので、青年の言葉に易々と頷くことはできなかった。
「旦那様のお年なら、わざわざ手を出さなくても放っておけばいつか……ん？逆ですかね？　恨んだ相手が目の前で安穏と大往生しそうになるのが我慢できなかった？　刑事さんはどう思います？」
「それを訊ねる相手は俺じゃないだろう。……それにしても、卵ごときの汚れを気にするだなんて。そんなに潔癖症だったのか、被害者は」
「いえ、そういうわけじゃないですよ。旦那様は若い頃は仕事人間だったらしくて、退職した今でも食事なんぞに時間と手間を掛けるのが惜しい、ってのが持論でして。ゆで卵、つるっと食べられるじゃないですか。おいしいですし」
まあ、旦那様に味覚という概念があったかどうかは不明ですがね、とウィル青年は付け加えた。なんでも、黄身が緑色になるまでカチカチに茹でても、被害者は文句ひとつ言わなかったそうだ。
「まあ、エール親父はそんな妥協はしませんでしたね。そういう環境で、ずっと卵を茹でることを強いられ続けたせいで、現在あの人の固ゆで卵は世界一といっても過言ではないほどの極地に達しています。……刑事さんも、おひとつどうです？」
先日そこに仕込まれた毒物のせいで主人が死んだばかりだというのに、意気揚々とゆで卵を勧めてくるウィル青年。どういう神経をしているんだコイツ、とスコッチ刑事は思わなくもなかったが、勢いに押されて殻付きのゆで卵をひとつ押し付けられてしまった。かなり迷惑である。
「さあ、心してご賞味ください。かの大料理人・エール親父の遺作、味気のある固ゆで卵です。旦那様が死んじゃったせいで有り余ってるので、どんどんどうぞ」
「いや、だから容疑者はまだ死亡していないと……っと、ん？」
殻を剥き、ゆで卵を口に放り込んだ瞬間、スコッチ刑事は言葉を失った。ウィル青年がふふふ、と楽しそうに刑事の表情の変化を眺めている。スコッチ刑事はおそるおそる、事態を再確認するためにゆっくりと咀嚼した。絶妙の固さでほろほろと崩れていく黄身と、舌の上にじわじわと広がっていく、塩気。
その瞬間、刑事には事件の真相が見えたのだった。

『驚きました？　最初から塩味が付いているゆで卵なんて、画期的だと思いません？　やっぱり、エール親父は最高の料理人ですよ。ちょっと旦那様を殺しちゃったけど。……え。作り方？』
後日、スコッチ刑事は自宅の鍋でふたつ、卵を茹でていた。鍋が煮立ったの

を確認した彼は、ぐらぐらと湯気が上がっている傍らに水を張ったボウルを用意する。火元に意識を向けつつも、彼は棚から塩の詰まった袋を取り出した。そしてボウルの中に、教えられた分量だけスプーンに掬った塩を放り込み、溶かす。

「……そろそろか」

時計の針を確認した刑事は、おもむろに鍋をぐらつかせていた火を止める。卵をザルにあげて取り出した後、彼はボウルに溢れかけた塩水の中に卵をとぷんと沈めた。……もしウィル青年に間違った知識を植え付けられていなければ、これで完成するはずだ。

真水で茹でたゆで卵を、熱湯から取り出した直後に塩水につける。すると浸透圧によって、水中の塩分が卵の黄身まで染み込んでいく。そのまましばらく置けば、殻に傷をつけることなく、最初から塩味の付いたゆで卵の完成だ。面倒な食事を嫌った被害者には、さぞかし喜ばれた一品だろう。まさか同じ方法で毒物が仕込まれるだなんて、思いも寄らなかっただろうが。

『……おい、エール。何故、こんな回りくどい手段を選んだんだ。殺人なら、もっと良い方法があっただろう』

留置所で容疑者にこの方法を提示すると、彼は観念するように肩を落としていた。そんな容疑者の様子に、スコッチ刑事は思わずこんな問いを投げかけていた。それはこの犯行に思い至ってから、ずっと頭を支配していた疑問だった。

彼の立場ならばもっと静かに、誰にもそれとは気付かれないように被害者を殺すことも出来たはずだ。毎日の食事に少量のヒ素を混ぜたり、いっそのこと人目を盗んで階段から被害者を突き飛ばしてみたり。そっちの方がずっと簡単で、気分も晴れるだろう。だが、彼はそうしなかった。それは何故なのか、問いかけずにはいられなかった。

スコッチ刑事の質問に、うなだれていた容疑者は顔を上げる。料理人とは思えないほど痩せこけた、みすぼらしい男だった。彼はしばらくスコッチ刑事の問いかけにぼんやりしていたが、やがて黄ばんだ歯をにっと見せて唇を歪めた。

『他の方法は、手間が掛かるな。毎日の食事に毒を混ぜたり、人目を気にしながら常に機を窺ったり。だが、そんなことはもううんざりだ。もうそんな苦労はしたくない。あの男のためには、もう……』

どうしてあの方法を取ったのか、だって？　と容疑者はスコッチ刑事の質問を復唱する。とても愉快そうに。まるで、自分の悪戯を誇る子供のような、嬉しそうな表情で。あれは簡単だった、と。あの方法なら、あの方法ならば、

『手が汚れないからだ』

水に沈んだ卵に、小さな亀裂が走った。

死が二人を分かつまで

森煮豆仁

一　切断の宣告

差出人のところには、恋人の名が記されていた。だから彼女は何の疑いも持たず、この荷物を郵便配達人から受け取ってしまった。

彼女は――有川百合は雑誌のモデルをしている。人並み外れた絶世の美女、というわけではなかったが、人に好かれる愛嬌ある笑顔の持ち主であるため、人気は高かった。また、すらりと滑らかに伸びる脚と腕をもっていることから、洋服店におかれるようなマネキン人形のモデルになったこともある。

そんな彼女だから、一般的なファンの他に、ある種の狂気を帯びた人間に付きまとわれることがしばしばあった。夜道で後を追いかけられたり、尋常ではない手紙やプレゼントを贈られたり。もっとも、それらに関しては所属している事務所がすべて対処してくれたので、今のところは実際的身体的な危害は彼女の身に起きていなかった。

それゆえ、油断していたのだ。

自宅の住所は親しい人以外知らないはず。差出人は恋人となっている。よってこの荷物は恋人からのプレゼントに違いない。

百合はそう思い、油断した。それが命取りだった。

玄関から居間へとその荷物を運ぶと、彼女は早速開封しにかかった。

その荷物は大きめの段ボール箱で、上をガムテープで封されていた。重さは四、五キロほどで、中身がみっしりと入っているためか運ぶ際に音などはしなかった。

カッターナイフがガムテープに突き立てられ、そしてスッと横にひかれた。しかし、ふたは未だ開かなかった。右端と左端に残ったガムテープがそれをさせなかったのだ。

彼女はふたに手をかけて、無理やり力づくで開こうとした。ガムテープは最後の抵抗をしたが、残念ながら――本当に残念ながらふたは開いてしまった。

続く悲鳴は当然のものだった。

箱の中には、彼女そっくりのマネキンがバラバラに切断されて収まっていた。隙間なく几帳面に箱を埋める両腕両足、胴体、そして頭。ご丁寧にも、頭は目が箱の外を見つめるよう詰めてあった。そのせいで百合は、箱を開けた際、その虚ろな顔と目を合わせてしまった。

さてしかし、箱の中にあったのがそれだけであったならば単純な嫌がらせとしてこれを済ますことができただろう。だがマネキンの他に、小さくとも強力な、爆弾ともいうべきメッセージカードが入っていたためそうはいかなくなった。

メッセージカードには短くこう書かれていた。

「つぎはおまえのばんだ」

二　茶会の面々

「それで警察には届けたんですか？」

僕はそっと有川に尋ねた。

「いえ、変な噂が広まって評判が悪くなるといけないから、と事務所から頼まれてしまって……」

「俺は絶対に通報すべきだと思うんだが、彼女はそういって拒否するんだよ。全く、本当に何かあったらどうするんだ？　俺はいつでも有川を守れるわけじゃないんだ」

憤慨したように彼女の恋人である宮島智雄がいった。彼は本気で彼女のことを心配しているらしく、目にはただならぬ真剣さが宿っている。それを見ると、呼ばれてもいないのに彼女にくっついてお茶会へやって来たのは仕方がないことだと思ってしまう。

彼の腕は、有川の細い脚とは対照的に丸太のように太く、変質者でも一発で殴り殺すことができそうだった。しかしそれでも、一日中ずっと彼女を護衛できるわけではない。その点を見失わないあたり、宮島は軽率かつ無責任な人間ではないらしい。

「そうですよ。その変質者はあなたの住所を知っているわけですからね。いつか部屋に押し入られるかもしれませんよ」

「ああ、その点なら大丈夫です、ハミルトン先生。事務所が他のマンションに

新しい部屋を借りてくれたので」
　いや、それでも……とこのティーパーティの主催であるハミルトンは続けようとしたが、
「まあともかく、この話はそろそろやめにしましょう。百合さんには気分転換が必要ですよ」
　といって塚本祐樹が遮った。これにより、以降話は穏やかかつ愉快な方向へ流れていった。初めはこわばった笑顔しかできなかった有川は、次第に自然な微笑みを浮かべるようになり、宮島もそれにつられて身体にみなぎらせていた緊張をほどいていった。
　この、秋色の山々を臨むお屋敷での昼食会並びにお茶会は、先も述べたようにアラン・ハミルトンが親交を温めるため開いたものである。その目的は概ね成功しているようで、紅茶を飲みつつ会話を交わしつつの優雅な時間は居心地よく過ぎていく。
　ハミルトンはヨーロウ大学で英米文学の研究をしている文学者だ。特にチャールズ・ディケンズを好んで扱っているというが、その詳しい研究内容に関しては僕はあまりよく知らない。しかしその道ではかなり名の知れた学者であるようで、書く論文書く評論全てが世界中の文学者から高い評価を得ているらしい。とはいっても本人はいたって普通の人間で、多少内向的な面があるが、知人や大学で受け持っているゼミの学生――有川のことだ――と茶会を開く程度には社交的なところも備えていた。妻はおらず、だが二十歳を過ぎた娘が一人いて、二人で都から離れた山奥の小さな屋敷で暮らしている。ところが、その娘、リリーとは微妙にこじれた親子関係で、また、彼女は今体調を崩しているらしく、今回の茶会には参加せず二階の自室で眠っている。
　塚本祐樹は、そのリリーのピアノレッスンをしている男だという。真っ黒いスーツをしなやかに着こなす彼は一見きざでいけ好かない男のように思えるが、その実控えるべきところで自分を控え、出すべきところで自分を出す、非常によくできた人物であるようだ。ほんの少し、全てが計算づくであるように思えてしまうが、それはきっと僕のひがみ、妬み、羨みからくる邪推だろう。
　僕、萩原宗光はといえば、ぱっとしない文筆家以外の何者でもない悲しい男である。かろうじて推理小説らしきものを雑誌に載せてもらい生計を立てているが、怪奇だの猟奇だのを前面に出した時代遅れな作風のせいで人気はない。自分では合理的で意外な解決をつけて本格らしさをアピールしているつもりなのだけれど……。一応まだ青年と呼ばれるような身なので、これから先どうなるのかは分からないが、どうにも大成せず一生を終えてしまう気がする。
　そんな僕がどうして偉大な文学者の茶会の場にいるのかというと、それは伯父の代わりとしてだった。詳しくは非常にどうでも良いので省くが、ハミルトンの友人である僕の伯父は二週間前にこのお茶会へ招待されて、そして参加すると答えた。しかしその前日になって、つまり昨日になって所属している乗馬倶楽部の例会と茶会が同じ日に行われることに気が付き、どうせ毎日暇なのだろうからと僕に茶会へ行くよう命じたのだった。見知らぬ人しかいないお茶会は恐怖でしかないのに……何とも酷い話である。
　とまれこうまれ、僕、有川、宮島、塚本、ハミルトン、リリーの六人が、今この屋敷の中にいるのだった。

三　舞原酔理との思い出

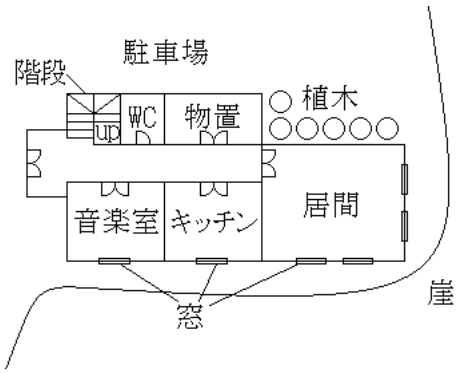
「萩原さん、舞原教授は……いや、君の伯父さんは最近どうですか？　元気にしていますか？」
　空になったカップを優雅な手つきでテーブルに置き、ハミルトンがいった。
「ええ、変わりなく。というより、元気が有り余っているようです。今日だってこの茶会を欠席して乗馬倶楽部へ行っているくらいですからね……伯父に代わって謝ります。本当に申し訳ありません」
「いえいえそんな。新しい友人ができて私は嬉しいですよ。私は出不精ですから、こういう機会がないと世界が広がらないんです」
　彼の書いたものは世界中あちこちへ散らばるというのに、彼自身はこの屋敷と大学のみを生活の場としている。学者とはそういうものなのだろうか。
「その舞原教授とは一体どういう方なのでしょう。非常に愉快そうな人物に聞こえますが」
「実際に会うとなったら後悔しますよ、塚本さん」
　心からの言葉だった。あの舞原酔理という男は、そういう性質の人間なのだ。
「そういわれると余計に気になりますね」

「気になる内が花ですよ。会った瞬間にその花は腐り落ちます」
「実の伯父に対してそこまでいうということは、何かあったのですか」
「ありすぎて数え切れませんよ。生まれてこの方、彼からは迷惑をかけられ続けているんですから。血の繋がった親戚でなかったらとっくの昔に縁を切るか、頭の病院へ叩き込むかしていましたね」
紅茶で少し唇を湿らせ、さも楽しそうな顔で塚本は、
「例えばどんなことがあったのでしょう」
「どんなこと、ですか……あまり思い出したくないんですけど……」
あまり、どころか全くもって思い出したくない。それはできれば二度と表に出したくない記憶だ。しかし僕は聞かれては答えてしまう性分なので、素直にトラウマを告白してしまった。
「僕がまだ幼かった頃、彼が運転する車に乗せられて山奥へドライブに行ったことがあるんですが……」
夏真っ盛り。太陽は不快なほどに光り輝き、空気は湿気を多量に含んで気持ちが悪かった。そんな中のドライブは、その言葉が持つある種のさわやかさとは正反対のグロテスクなものであった。伯父の運転はそれは酷かった。五分に一度はエンストし、その度に伯父は腹を立ててハンドルを蹴飛ばした。そして蹴飛ばす度にクラクションが鳴り響き、それに合わせて森の動物たちが唸り声をあげた。僕は怯え、伯父は怒鳴り散らし、動物は威嚇をやめない。そんな地獄が三時間以上も続いたのだ。正気の沙汰ではない。それだけで終わるならまだしも、ドライブの終盤に彼は道路に飛び出してきたオオサンショウウオをひき殺し、僕はその掃除を手伝わされるはめになった。あの時触れたオオサンショウウオの肌と、伯父の冒涜的な罵詈雑言は今でもはっきりと覚えている……。
「なるほど、それはそれは……お気の毒でしたね」
そういいつつ塚本は口に手を当てて笑いをこらえていた。宮島、有川もである。ただ、ハミルトンだけはにこやかにうなずいていた。きっと彼も、伯父によって似たような経験をさせられたことがあるのだろう。それなのに伯父との友人関係を切らないとは、まるで仏のような心の持ち主だ。
「僕はそれ以来、伯父の運転する乗り物には乗らないようにしているんです。暴れ馬に乗るよりもよっぽど酷いですからね」
これから先もこの誓いは守っていく。死にたくないからだ。
「ちょ、ちょっとお手洗いお借りしますね」
有川がいった。ちょっとひきつったような声になったのは、恐らく笑いをこらえていた反動だろう。私の拷問体験談は他人を楽しませる役に立ったようだ。あの頃の苦痛が報われたように思えたのだが、それと同時に言い知れぬ悲しさも覚えたのは何故だろう。壁にかけられた時計が午後三時の鐘を打つのを聞きながら、僕は少し考えた。
……そして、それから二十分が経った。しかし有川は帰ってこなかった。いくら女性だからといってもこれは少し異常ではないだろうか。もしかすると、彼女の身に何かあったのでは……。
「百合の様子、ちょっと見てきますね」
宮島が不安げな表情を浮かべながらそういった。手に少し汗がにじんでいる。
「私もついていきますよ。ずっとトイレを我慢していたのです」
塚本は能天気な台詞を吐いたが、それは場の空気を察して何とか穏やかならざるものを追い出そうとした結果だろう。しかし今回に関してはあまり効果が得られなかった。
そして二人は連れ立って居間から出ていき、僕とハミルトンだけが残された。
「きっと思い過ごしですよ」
心にもないことをいった。いや、願っていることではあるが。
「そうだと、いいんですけど……」
ハミルトンがかすれた声で呟いたのと同時に、外の廊下から凄まじい悲鳴と怒号が聞こえた。
急いで廊下に飛び出すと、玄関の左隣にある部屋の前で立ちつくしている塚本と宮島が目に入った。
「一体何があったんですか」
塚本はこちらへ振り向き、ゆっくりと首を横に振った。それだけで私は何が起こったのかを理解してしまった。
私たちもその部屋へ向かった。そして目の当たりにした。
そこは音楽室であるようだった。楽譜を収めた大きな本棚、グランドピアノが鎮座している。いつもならばこれらはまるで部屋の主であるかのように存在しているのだろう。しかし、今は違うものがこの空間を支配していた。
バラバラに切断された全裸の死体。それが音楽室の支配者だった。床にばら

まかれ、生臭い血を滴らせ、大きな血たまりを作って暴力的な死を物語る死体。空気を通して伝わるその生々しい温かさは、死体は幻覚ではないということを訴えている。

両手両脚、頭に胴体。それらは切断されて床に転がされていた。恐ろしいことにも、頭はこちらに顔を向けている。それは、有川百合の顔だった。

宮島はふらふらと音楽室に入り、そして生首を抱きしめて声もなく泣いた。誰もそれを止めることはできなかった。



四　予告のある切断

居間にて。

ヨーロウランド・ヤードいわく、こちらへ着くまでにはあと三十分以上かかるという。ヤードの警察官たちを信頼してはいるが、それにしたってもう少し早く着いてもらいたい。僕たちだけではバラバラ死体がすぐそばに存在するという重圧に耐えきれそうにないからである。

そんな僕が音楽室の様子を詳しく覚えてしまったのは、ある意味仕方がないことだった。死体から目を背けたいがために他の部分へ意識を向けたのだ。先も述べたとおり、バラバラ死体以外で音楽室にあったのはグランドピアノと本棚だけだった。……いや、確かそれらに加えて藤籠を逆さまにしたような椅子も置いてあった。どれも飛び散った血によって汚されていて、まるでそれら自体が血を流しているかのように見えた。次に覚えているのは、割れた窓ガラスだ。外向きに割られた窓ガラス。恐らく、変質者――今となっては殺人者――が外へ逃げ出す際に割ったのだろう。窓の外はすぐ崖になっているが、人が歩ける程度の余地はあるので(図を参照)犯人は転落死せず逃げおおすことができる。さらに……。

「どうして、どうして百合はあんな死に方をしなくちゃならなかったんだ。あんな殺し方をされなくちゃならなかったんだ」

沈黙に沈んだ居間の中で、低く唸るかのような宮島の声ははっきりと聞こえた。怒りと悲しみの入り混じった感情が外にあふれ出てしまったのだろう。悲劇と呼ぶにしてもあまりに残酷な悲劇が現実のものとなってしまったのだから、これは仕方のないことだ。先ほど服に付着した血が、毒々しい赤色に輝いて見える。

それはそれとして、しかし、その言葉は彼の感情だけでなく、この事件における大切な点をストレートに表しているのではないかと僕は思った。すなわち、犯人は何故彼女を切断したのか、という点である。

「異常な予告を送り付け、そしてその通りに殺人を犯すなんて正気の沙汰ではありませんよ。完全に気が狂っている。犯人は快楽殺人者、理性なき獣です」

若干恐怖をにじませた震えた声で塚本がいう。確かに、そう考えるのが最も妥当というか、一般的だろう。だが、僕のような推理小説愛好家は不謹慎ながらも違う可能性を模索してしまう。

犯人が死体をバラバラに切断する理由は何か？　真っ先に思い浮かぶのは死体を持ち運びやすくするため、という理由だ。バラバラにすればコンパクトに死体をまとめることができるし、また分割して運ぶこともできる。これは古今東西の様々な推理小説で使われており、未だに新たな応用法が発見されている。だが、今回の事件には当てはまらないだろう。殺害現場はどう考えても音楽室で、そして死体が発見されたのも音楽室である。ゆえに死体はどこにも運ばれていないので、先に挙げた理由は採用できないのだ。もちろん、殺害から発見までの間にどこかへ持ち運ばれ、そして返されたということも考えられなくはないが……。

もう一つパッと思いついたのは、死体を隠すため、というものだ。バラバラにすることで、先ほど述べた通り死体はコンパクトになり、また分割できるよ

うになる。そうして、小さな戸棚であっても死体をしまうことが可能になるのだ。この理由に関しても前例は山ほどある。だが、やはり今回はこれには該当しないだろう。殺害から発見までの間は長く見積もって十五分。そのうちの数分死体を隠すためにバラバラしたのだとは考えられない。そもそも、この事件においては死体を隠したからといって何も状況は変わらないと思われる。

推理小説の歴史は長く、それ故この二つ以外にもバラバラの理由は数多く存在している。よって一つ一つ検証していくのは骨が折れることだし、何よりも一人で全てを考えるのはほとんど不可能だ。

「ともかく、ここは落ち着いて警察の到着を待ちましょう。ほら、紅茶のお代わりはどうですか？」

珍しくハミルトンが皆を励ますようにいった。そして居間から出ていった。彼のいう通りかも知れない。それに情報が不十分な状態でごちゃごちゃと物事を考えても、答えにはたどり着けないだろう。

というわけで僕たちは警察の到着を待った。ハミルトンがいうように落ち着くことはできなかったが、幸いにもパニックには至らなかった。

ようやくヨーロウランド・ヤードの面々がこの屋敷に着いたのは、通報から四十分後のことであった。けたたましいサイレンと共にやって来たパトカーの一団は、屋敷の北側にある駐車場へ滑り込んだ。

「私がこの捜査の指揮を担当するブラッドストンだ。どうぞよろしく」

挨拶と同時に差し出された警察手帳には、金文字の筆記体でルイス・ブラッドストン警部と書かれている。

屋敷の玄関先へ大勢の部下を引き連れてやって来たその大男は、まるでボディビルダーのような屈強な肉体を持っていた。髪も短く刈り上げてあり、見た目はいかにも肉体派だった。しかし目には理知の光が燦然と輝いていて、数えきれないほどの犯罪がこの光によって暴かれてきたのだろうとうかがい知ることができる。

「ふむ、とりあえずは現場を見せてもらおうかな」

物腰は柔らかに、だが眼光は鋭い。私たちは簡単な自己紹介ののち、彼らをあの音楽室の前へ案内した。そしてドアを開けた。

「なるほど。しかし、通報する時にはできればもっと正確に情報を伝えてもらえると助かる。混乱していたのは分かるが……。ああ、ハミルトンさん、だったかな。あなたは女性一人のバラバラ死体が見つかったといって通報した。だが、ほら、目の前にあるのは、どう見ても二人分のバラバラ死体じゃないか」

五　予告のない切断

仲の良い姉妹が如く、二つのバラバラ死体は並べて置かれていた。左側には先ほども見た百合の死体が、そして右側には……。

「リ、リリー……」

喉の奥から絞り出すようにして、ハミルトンがうめく。僕はリリーの顔を見たことがないため確信はできなかったが、彼のその言葉から、有川の隣にある二つ目のバラバラ死体はリリーのものであると断言しても構わないようだった。

その死体は有川のものと同じように、両腕、両脚、そして頭が胴体から切り離されている。そしてこれも、作り物ではない本物の死体であるようだった。

「リリー……」

ハミルトンは何かに憑かれたかのような足取りで音楽室の中へ入ろうとした。しかしそれはブラッドストンによって阻まれた。

「現場を荒らされては困る。これ以降は決してこの中へは入らないように。今から現場検証を行うから、その間皆さんは居間で待機をしていて貰おうか」

その言葉に従うほかなかった。僕らはここまでの経緯を簡単に説明した後、居間へ戻り、この後あるであろう事情聴取まで大人しく待った。

居間で待機している間、私たちは何の会話も交わさなかった。当たり前だ。あんなおぞましい殺人が目の前で起こったのだから。恐怖と共に混乱が脳で渦巻いている。

宮島、ハミルトンの顔は虚無という言葉以外では言い表せないような表情を浮かべながらソファに静かに腰かけていた。感情の激しさが極まると、人間は処理できなくなりこうして動作を停止してしまうようだ。

塚本は窓際の椅子に座って顔を伏せていた。ピアノ教師と生徒という間柄以上の何かが彼とリリーとの間にあったのではないか。そんな考えがふと浮かんだが、確かめることはためらわれる。僕はそんなことをしてしまうほど人の心が分からない人間ではない。

立っているのは僕一人だけだった。壁に寄りかかりながら手に持ったカップの中の紅茶を飲むと、それは既に冷めてしまっていた。だがそれでも心を落ち着かせる効果はあって、僕は現場のことを冷静に思い出すことができた。

有川の死体発見時と、リリーの死体発見時では現場の様子は異なっていた。もちろん死体の数が増えていたのだから当たり前だけれど、他にも大きく変わっているところがあった。現場に、斧と血塗れの雨合羽が置かれていたのだ。

斧は死体を切断した時に使われたものだろう。鋭い刃に残された血の汚れがそれを物語っている。雨合羽の方は、死体切断時に服に返り血がつくのを防ぐために違いない。

これらは別に現場に存在しても不思議ではないものだ。むしろあって当たり前だろう。しかし、それでもこの二つのアイテムにはおかしなところが存在する。すなわち、有川の死体発見時には何故これらは現場に放置されていなかったのかというところだ。犯人は一体何を考えて……。

「申し訳ないが、一つ聞きたいことがあるんだが」

居間の扉が開き、ブラッドストンが顔を覗かせた。

「ハミルトンさん、この屋敷の戸締りはしっかりとしていましたか。玄関だとか窓だとか、しっかり鍵をかけていましたか」

ハミルトンはゆっくりと顔をブラッドストンの方へ向けて、

「ええ、それはもう。山の中とはいえ、何があるか分かりませんから。今回みたいな……」

「ありがとう、これではっきりした。犯人はあなたたち四人の中にいるということがね」

六　ルイス・ブラッドストン警部の推理

「何、簡単な話だ。厳重に鍵がかけられているならば、皆さんがいうような変質者とやらが外からこの屋敷の中へ侵入することはできないだろう。だから犯人はあなた方の中の誰かだということになる」

「しかし、音楽室の窓は割れていたのだから……」

「ええ、ハミルトンさん。あなたのいう通り音楽室の窓は割れていた。しかし、窓ガラスは外向きに割られていたということを忘れてはいけない。もし変質者が屋敷へ侵入した時に窓を割ったのだとしたら、内向きにガラスが割られていないといけない」

ブラッドストンのいう通りだ。だが……。

「犯人が私たちの中にいるというのは分かりました。しかし、それなら何故窓ガラスを割ったのでしょう？　逃げる必要がないのならそんなことをしても意味がないじゃありませんか」

「それは恐らく……第一のバラバラ死体が発見された時点において、この事件は変質者によるもので、そしてその変質者は屋敷から逃げていったのだとあなた方に思い込ませるためだろう。実際、それは上手くいったんじゃないかな。犯人はこうやって皆さんをある意味油断させることにより、時間をしばらくおいてからの第二のバラバラ殺人を邪魔されないようにした」

それが真相だとすると、つまり。

「犯人は、初めから有川さんとリリーさんを殺すつもりだった、ということですか……」

僕の呟きが居間に静かに響く。遅れてブラッドストンが低い声で肯定した。

犯人が初めから二人を殺すつもりだったと考えると、あの斧と雨合羽の奇妙な出現にも納得いく説明ができる。有川を殺した際にそれらを音楽室に残しておくと、僕たちのうちの誰かがそれを動かして、リリー殺しには使えないような状態にしてしまう恐れが出てくる。これを防ぐため、斧と雨合羽は有川をバラバラにした後どこかに隠されたのだろう。隠し場所として考えられるのは音楽室の窓のすぐ外だ。有川さんの死体を発見した時、そこは確認していない。……奇妙な謎がこれでまた一つ解けた。が、しかしここで新たな謎が生まれてしまった。犯人は何故時間を空けて二人を殺したのか？　また、何故有川さんにのみ脅迫状を送ったのか？

取り敢えずここまでの考えをブラッドストンに伝えると、彼は頷いて廊下にいる警官に窓の外をより詳細に調べるようにいった。

しばらくの後、ブラッドストンは居間を出ていった。そして戻ってきた時には大きなメモ帳を手にしていた。

「では、そろそろ事情聴取をしようか」

七　退屈かつ重要な情報開示

「まず検死や現場検証の結果だが……」

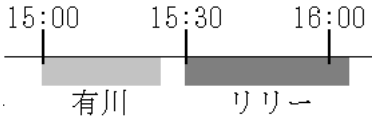
ブラッドストンは居間の扉に寄りかかりながら話を進める。それはまるで僕たちをここから出すまいとするかのように見え、若干の不安を覚えた。

「検死について。有川さんとリリーさんは、首を絞められて気絶させられた後に斧で切断されたようだ。あまりにも惨いことだが、完全に死亡する前にバラバラにされたことになる。」

宮島とハミルトンは苦しそうに唸った。それはそうだろう。自分の愛する者があんな残酷な目にあって平気でいられるはずがない。

「専門家によると、気絶させバラバラにするのは、慣れた人間ならば五分ほどでできるそうだ。また、二人とも切断面にみられる特徴から二人をバラバラにした人物は同一人物だと断言して良いそうだ。

二人ともバラバラにされた後どこかに運ばれたような形跡はなかった。そして、死亡推定時刻はどちらも午後二時から午後四時過ぎまでだが、あなた方の話を踏まえたうえで考えると有川さんが午後三時から午後三時二十分までで、リリーさんが午後三時三十分から午後四時十分までとなる。



有川さんは午後三時まで生きている姿が皆さんによって確認されており、そして死体が発見されたのは午後三時二十分。リリーさんに関してはあなた方が有川さんの死体を発見した後音楽室を離れたのが午後三時三十分で、死体を発見したのが午後四時十分だからだ」

そこで一度彼は咳をして、

「更に検死で分かったことがもう一つ。アランさん」

ブラッドストンはハミルトンを睨みつけた。しかし彼は微動だにしなかった。

「非常に分かりにくいものだったが、リリーさんの二の腕と太腿の内側から古い火傷の痕がいくつも見つかった。あなたは、リリーさんを虐待していたようだな」

ハミルトンが娘を虐待？　あの優しそうな人が、そんなまさか……。だが、ハミルトンは力なく首を縦に振って肯定した。

「ええ……。確かに、私は……直接的ではないにしろ、リリーの虐待に協力していたといえるでしょう。その火傷をつけたのは、今は亡き妻です。私には、研究にのめり込んで家を長く留守にしていた時期があったのですが、その時彼女は寂しさを紛らわすため違法な薬物に手を出してしまいました。そして、それによって気をどうにかしてしまい、あんな真似を……。私が気付いた時にはもう手遅れでした。暴れる妻を私は抑えることができず、結局彼女が薬物中毒で亡くなるまで虐待は続き……。それ以来、私はあの子と接することができなくなっていました。毎日の食事でさえ、顔を合わせて食べることはありませんでした」

ハミルトンの顔には絶望が貼りついていた。後一押しでもするとすぐに自殺してしまいそうな……。

ブラッドストンはまさかそんな話が飛び出すとは思ってもいなかったようで、少し動揺した様子を見せたが、すぐさま気を取り直して現場検証の話に移った。

「現場にあったものからは、犯人特定に使えそうな指紋は見つからなかった。アランさん、リリーさん、そして塚本さんの指紋が見つかったものの、それらは日常生活において付着した指紋だと考えてまず間違いはないだろう。その他指紋が拭き取られたような跡も見られないことから、犯人は手袋か何かをつけて犯行に及んだものだと思われる」

それはそうだろう。この事件はかなり計画的なものだ。犯人が手袋を用意しないはずがない。

「現場検証で得られた情報は以上だ。これらを踏まえたうえで、今から全員に質問をしていく」

かくして尋問が始まった。これは非常に長く退屈なものだった。しかし明ら

かになった有用な情報はとても少なかった。
午後三時から有川の死体発見までの間で居間を離れたものはいるか？　ハミルトンと塚本が手を挙げた。午後三時三十分からリリーの死体発見までの間で居間を離れたものは？　僕と宮島、ハミルトンが手を挙げた。手袋を持っているものはいるか？　誰も手を挙げなかった。何か物音を聞いたりしたものはいないか？　誰も手を挙げなかった。
このように延々続いた単調な質問攻めは、突然のチャイムによって強制的に中断された。
「何だ？　一体誰だっていうんだ。入口に置いておいた奴らは何をしているんだ……」
ブラッドストンは不機嫌な顔をして居間を出ていった。そしてしばらくした後、聞き覚えのある怒鳴り声が玄関の方から聞こえてきたので、僕は頭を抱えて逃げ出したくなった。
「おい、わしじゃ。わしじゃよ。おーい、聞こえているか、アラン。おう、なんじゃこいつらは。離せ、わしを誰だと心得るか。舞原酔理じゃよ。邪魔をする奴らは全員地獄に堕ちろ」

八　舞原酔理登場

思考機械（シンキング・マシン）オーガスタス・S・F・X・ヴァン・ドゥーゼン教授は、その名と肩書を綴るだけにアルファベットの半分を使わなくてはならないが、ここに登場してしまった僕の伯父、舞原酔理の場合は、名前と肩書を発音するのに五十音全てを使わなくてはならない。そんな伯父だから、もはや当然のようにヨーロウランド・ヤードで勤務していた経験があった。役職は知らないがともかく高い地位にあったらしく、今なおその権力は衰えることがないという。現に、今もこうして、ほとんど叫ぶかのように怒鳴り散らしながらブラッドストンを後ろに従えて屋敷の中へと侵入してきた。
「おい、君たち、話は聞いたぞ。陰惨な殺人事件だとな？　だからといって元気を出せとはいわんがな、辛気臭い顔をするのだけはやめてくれ。わしは朝市の満員電車と葬式が何よりも嫌いなんじゃよ」
黒いスーツは、そのだるまのような身体を包み込むにはあまりにも小さすぎるようで、無理やり留められた前のボタンは今にも弾け飛びそうだ。つやつやとした禿げ頭にのせたシルクハットも、危ういバランスを保って何とか頭にへばりついているが、少しでも風が吹くとあっという間に地面へと滑り落ちてしまいそう。目にかけた片眼鏡は半分ずり落ちているし、残念ながら彼が絶好調であることは疑いようがない。
「おう、宗光じゃないか。何だこんなところで。どうしたんじゃ」
「伯父さんが自分の代わりにここへ行けと命令したんじゃありませんか。忘れたんですか」
「そう、そうじゃった。すまんすまん」
少しも悪びれた様子なく伯父は爆笑した。
「ところでここまでどうやって来たんですか？　伯父さんの車はこのあいだ湖に沈んでしまったじゃありませんか」
「馬に乗って来たんじゃよ」
意味が分からなくて返事ができなかった。
「せっかくの乗馬倶楽部の例会だというのに、わしが馬に乗るのを会長がどうしても渋るもんじゃからな、腹いせにそいつの馬をこっそり拝借してここまで来てしまったんじゃ。」
伯父を馬に乗せまいとする会長の気持ちはよく分かったが、腹いせに馬を拝借する伯父の気持ちはこれっぽっちも理解ができなかった。
「馬はいいぞ、ふふん。ふもとからこの屋敷まで車では二十分かかるが、馬なら十五分もかからんのじゃ。なんせ車道を走る必要がないからな。君たちは全員車でここまできたようだが、何なら帰りはわしの馬に乗っていくかね。ああ、ところで馬は玄関の左脇のスペースにとめておいたんだが、それで良かったかな」
鯨のような髯を撫でながら、叔父は怒鳴った。彼は怒鳴るか叫ぶかわめきちらすか、そのどれかしか意思疎通の手段を持たない人間である。
「ま、そんなことはどうでもいいんじゃ。事情聴取の途中だったらしいな？　どれ、わしもひとつ捜査に協力してみるか」
先ほどからずっと黙っているブラッドストンの顔色が、一気に蒼白に変わっ

た。もはやここへやって来た時の威厳は失われてしまっていた。何とも哀れなことだが、運が悪かったと諦めてもらう他ない。
事情聴取の続きは、それはそれは退屈なままに再開し、そして退屈なまま終了した。だが、今までに明らかになったもの以外の有益な情報はさっぱりなかった。曰く今日のお茶会は三週間前から決まっていた。曰く有川は母と父の三人家族。曰く塚本はリリーのことを好ましく思っていたが、その逆もまた然りというわけではなかった。曰くリリーはごくたまに父の研究室を訪れていた。曰く……エトセトラエトセトラ。しかし、それだというのに尊敬すべき我が伯父舞原酔理は最高に上機嫌そうで、ブラッドストン警部の顔色もほんの少しだけよくなっていた。
「一体どうしたっていうんですか。何故そんなにも機嫌が良さそうなんですか」
「何故って、決まっておるじゃろう。わしが立てた仮説を打ち砕くような情報が、この訊問によってでてこなかったからじゃよ」
仮説？　まさか、彼はもうすでに事件の真相の一端を掴んでいるというのだろうか。いやいや、あの気違いじみた伯父がそんなことをできるはずがない。
「なんじゃその顔は。疑っておるんじゃな？　ふむ、確かにこの事件の犯人はかなりの知能を有しておる。だが、それ故に大きな過ちをおかしてしまったんじゃな。頭でっかちが過ぎて、周りへの注意が疎かになるという典型じゃ。また、費用対効果についてもさして思考を巡らせなんだろうよ」
ふんふんと鼻を鳴らしながら伯父が怒鳴る。その異常な迫力に、居間にいる全員が圧倒された。
「容疑者を一人に絞ることは非常に容易じゃ。誰ならば二人をバラバラにできるのか、と考えれば良い。宗光にだってすぐ分かるはずじゃ」
にやにやと意地の悪そうな顔をしながらのその物言いは、どこか腹が立ったが、しかし……。
「我々ヨーロウランド・ヤードも既に容疑者を一人に絞り込んでいる。舞原教授のいう方法でな」
伯父の後ろに控えているブラッドストンが、薄く笑みを浮かべながら呟いた。その効果は絶大だった。宮島、ハミルトン、塚本らはさっと顔をあげると、それで犯人は一体誰なんですか、と口々に叫んだ。
「よろしい。ではそれを今から教えてやろう……宗光がな。頼んだぞ」

九　萩原宗光の推理

あまりにも突然過ぎて、何故僕がそんなことを、と無駄な反論をしてしまいそうになった。こういう時、叔父には何をいっても意味がないということを今までの経験で知っていたのに。
全員の視線が僕に集まっている。一体僕に何をどうしろっていうんだ。犯人は誰なのかを指摘しろということか？　そんなこと僕にできるはずが……。
と、その時、頭に閃くものがあった。これは……こんなに簡単でいいのだろうか？　だが、こう考えるとこの人以外には犯行は不可能だ。ならば。
僕は腹を決め、その閃きによって得た推理を披露することにした。正解か不正解かは別として……。
「え、ええっと……はい。今回の事件は、二つのポイントを押さえることさえできれば犯人を絞り込むことができます……。
第一のポイントは、二体のバラバラ死体は、ただ一人の人物によって作られたということです。切断面の特徴からそれが分かると、検死によって明らかになりました。
第二のポイントは、犯行が行われたのは午後三時から午後三時二十分の間、そして午後三時三十分から午後四時十分までの間だということです。前者では有川さんが殺され、後者ではリリーさんが殺されてしまいました」
居間はしんと静まり返っている。ただ、伯父だけが顔を真っ赤にして笑いをこらえていた。
「さて、これらを合わせてみると次のことが分かります。
午後三時から午後三時二十分、そして午後三時三十分から午後四時十分までの、両方の時間帯に居間を離れていた人物が犯人である、と」
ああ、そうだ。これだ。僕は確信した。
「では誰が犯人となるのか。有川さんが殺された時間帯に居間を離れなかったのは、僕と宮島さん。よって塚本さんとハミルトンさんのどちらかが犯人となります」
容疑は消えたが、宮島は顔をかたくしたままだった。これから恋人を殺した

犯人が明らかになってしまうのだから当然だ。
「次に、リリーさんが殺された時間帯に居間を離れなかったのは一体誰なのか、ですが……これは塚本さんだけ。というわけで塚本さんは容疑者から除外されます。また、僕と宮島さんは既に容疑者からは外されています。
だから、こうして、犯人はただ一人だけに限定されるわけです。そう、ただ一人。その人物の名は」

＊＊＊

かくしてこの事件の幕は下りたわけである。
世にも稀なほど残酷、異常な陰惨さの不快な連続殺人だったがゆえに、その傷痕は後々まで残る深いものであったけれど、それでも真相が明らかにされたことで多少は救われたところがあった。いや、そう思わないでは誰も救われず、立ち直ることはできず、何もかもが絶望のままに終わってしまうだろう……。
罪を暴かれた犯人は大いに取り乱し、事件に見合わない矮小な動機を吐露した後、無様にもその場から逃げ出そうとした。居間を飛び出し、封鎖された玄関を無視し、そのすぐ隣にある殺害現場――音楽室へ飛び込んだ。そしてその窓から外へ這い出た……瞬間、ちょうど近くにいた馬によって蹴り飛ばされ、崖の下へと真っ逆さまに落ちていった。
罪には罰が与えられる。これはこの世の必然である。だから、犯人である彼、宮島智雄の墜落死は決して偶然などではなく、二人を殺害した時点で決められていたことなのだろう。

十　舞原酔理の解決

舞原酔理邸はイチノミヤストリートの南端に位置する白亜の豪邸である。英国からわざわざ取り寄せた建材により作られたその館は、かのウェストミンスター寺院を連想させるようなチューダー様式で、舞原伯父の奇妙奇天烈な趣味がよくよく表れていた。しかし、それはこの街においては非常に異質なもので、周囲の住民たちからはお化け屋敷であるかのように扱われている。
今日、僕がそこを嫌々訪れたのは、この前の連続バラバラ殺人における伯父の推理を改めて拝聴するためだった。あの日あの時、犯人のプライドをへし折らんとする伯父の計略――完全犯罪を成し遂げたと犯人に思い上がらせておいて、後で一気にそれを覆すという計略――に乗せられた僕は、誤った推理を披露してしまった。もちろん、その時点ではそんな計略は知らなかったので、いきなり伯父が推理を怒鳴り始めた時には何が何だか訳が分からなくなってしまった。ゆえにどのような経緯からあのような結末に至ったのか、正直なところしっかりと理解できていないのだ。
僕と舞原酔理伯父は、二人で暖炉の前の椅子に座っていた。ゆらめく炎が身体を温めてくれる。舞原伯父は目を細めながらウィスキーを一口なめると、大きく低く声でその推理を怒鳴り始めた。
「何がおかしいって、そりゃ殺害現場から宮島智雄の指紋が見つからないのがおかしいんじゃよ。奴は有川百合の死体発見時に生首に触れていた。ならばアランやリリー、塚本祐樹と同じように警察によって現場で指紋を発見されていなければならない。だが、実際にはそうはならなかった。一体これはどういうことじゃ？
まず考えられるのは、生首に付着した指紋が拭き取られた可能性じゃ。しかし、警察の調べによって指紋が拭き取られた痕跡はないということが分かっておるから、この可能性は除外される。
では、他にはどんな可能性が考えられるのか……回りくどいのはこの際よそう。わしが最終的に至った結論は、宮島が抱きかかえた生首は有川百合のそれではなく、よく似ている別の――彼女をもとにして作られたマネキンの生首だった、というものじゃ。言い換えると、皆が第一に発見した死体の生首は、マネキンのそれと入れ替えられていたということじゃ」
既に一度聞いているのにも関わらず、なるほどといわざるを得ない彼の推理に、普段から彼にはこういうまともな思考をして貰いたいと思ってしまった。
「さて、そう考えると今度は、何故宮島は自らが触れたのはマネキンの生首であると気付かなかったのか、という問題が出てくるがこれは簡単に解消できる。
宮島は、その生首はマネキンだと気付いていたのに、まるでそうではないかのようにふるまっていたと考えればよろしい。そして、何故そんなふるまいをしたのかという問いには、彼が事件の真犯人で、死体の生首とマネキンの生首

を入れ替えた張本人であるからだと答えればよいのじゃ」
　伯父の頭が暖炉の光を反射してぴかぴかと輝く。彼は再びウィスキーに口をつけると、
「こうして犯人が誰であるかは分かったが、彼には確固たるアリバイが存在していた。すなわち、有川百合が殺害されたと思われる午後三時から午後三時二十分までの間、彼は居間を出なかったために彼女を殺すことは不可能だったということじゃ。しかし、宮島が犯人であることはここまでで分かっておるから、したがって彼は何らかのアリバイトリックを使用したという結論に至る。ならばそのアリバイトリックとは何か？　これを答えるには多少の想像力が必要じゃろうが、そこまで難しくはないだろう。もっとも宗光にはどうにもならなかったようじゃが……。
　ともかく、アリバイトリックは何か、じゃ。これを考えた時、ようやくバラバラ死体とマネキンの生首の意味が見えてくる。この解もまた、わしの深遠なる論理と自由な発想によって明らかになったが、その過程を全て話すとなるとあと三日ほどこのまま暖炉の前で話し続けなくてはならなくなるから、結論だけ述べよう。
　奴は、有川百合とリリーの殺害順序と殺害時刻を我々に誤らせるため、二人の死体をバラバラにし、なおかつ一方の生首をマネキンの生首と入れ替えたのじゃ」
　そこで伯父はポケットからパイプを取り出して、たばこの葉を先に詰め込み火を点けた。そしてそれを大きく深く吸ってから、再び話を始めた。
「宮島は午後三時よりもずっと前に、まず有川百合ではなくリリー・ハミルトンを音楽室で殺害し、バラバラにしたんじゃ。そして彼女の生首をマネキンのものと交換して、何食わぬ顔をして居間に戻った……。
　時間は過ぎて午後三時。このタイミングで有川百合は居間を出たのじゃが、それと同時に別荘の外へも出ていったのじゃ。車を使ってな。宮島は、有川にそのように行動するよう何かしらの理由をつけて約束をしておいたんじゃろう。そうせねば、この先の仕掛けが不発になってしまう。
　再び時間は過ぎて午後三時二十分。ここでようやくリリーの死体が発見されるわけじゃが、犯人の非情なトリックが功を奏し、それは百合の死体であると認識されてしまった。これによりお前たちは、午後三時から午後三時二十分までの間に有川百合が殺されて、その時間帯居間を離れなかった人間は犯行が不可能であるから犯人ではあり得ないと思い込まされたんじゃ。
　さて、犯人は有川が初めに殺されたのだと思い込ませるため、マネキンのトリック以外にも様々な手を使っておることに気付いたかね？　例えば脅迫状の件じゃ。あの脅迫状によって犯人は、有川はバラバラにされて殺されてしまうかもしれないという考えをお前たちに植え付けた。そして実際に目の前にバラバラ死体が現れた際、それは有川の死体であると信じ込ませたんじゃな。これは有川百合がお茶会の席で脅迫状の話をせねば発動しないミスディレクションじゃが、宮島は彼女は絶対にこの話をするだろうと確信していて、もし話がでなかったら自分から脅迫状の話を持ち出すつもりだったのじゃろう。
　また、有川とリリーをバラバラにして殺したのもアリバイトリックのためだったんじゃよ。もし死体をバラバラにしていなかったら、お前たちのうちの誰かが身長やら体格やらの違いに気付き、死体の入れ替えトリックが失敗してしまう恐れがある。だから犯人は死体をバラバラにすることで、彼女らの身体的特徴を一目では判断できないようにしたんじゃ。
　それとあともう一つ。宮島はマネキンの生首を抱きかかえたわけだが、これは恐らく、生首を長い間人々の目に晒してしまうことで、それが偽物だと感づかれてしまうのを防ぐためだったんじゃ。しかし、これをすることにより犯人であると暴かれてしまったのじゃから、宮島は余計なことをしたんじゃな。奴は頭は良かったが、その分視野狭窄なところがある人間じゃった」
　伯父は大砲のような轟音をたてながら笑ったが、その眼は全く笑ってはいなかった。
「ここまで来れば後は簡単じゃ。死体を発見し、警察に通報した後、これまた予め取り決めておいた時間に百合が屋敷へ帰って来たタイミングで、宮島は居間を離れた。そして玄関先かどこかで首を絞めた後、音楽室でリリーと同じようにバラバラにしたのじゃよ。で、マネキンの生首を窓の外に投げ捨てるか何かした後、隠しておいたリリーの生首を元あるべきところに戻したんじゃ……。多分、リリーの生首は音楽室の椅子の中に隠しておいたんじゃないかね。あの椅子は藤の籠を逆さまにしたみたいな椅子じゃったからな。
　かくして十数分後、ヤードの連中が到着して第二の死体が発見され、ここで初めて君たちはリリーの死体を見たかのような錯覚に陥ったのじゃ。

長い長い話になったが、こうして犯人はお前たちを欺いて罰から逃れようとしたんじゃよ。もっとも、それは成功しなかったんじゃがな」
しばらく、館を沈黙が支配した。ただ暖炉にくべられた木々がはぜる音だけが聞こえた。
あまりにも残酷なその事件は、あまりにも悪魔的なトリックにより、悪魔そのものというべき犯人によってなされたものだった。しかし、その動機は。
「でも、動機は非常にありふれたものだったんですよね」
宮島智雄は有川百合を愛しており、そしてそれゆえに告白をした。しかし、既に恋人がいるからという理由であっけなくふられてしまったのだという。それでも諦めきれなかった彼は、彼女のことをこっそり調べ上げ、その恋人が誰であるかを突き止めた。
「いやはや、まさか有川百合の本当の恋人がリリー・ハミルトンだったとは、さすがのわしも見抜けなんだよ。最近はそれに対する理解が広まっているとはいえ、まだまだ充分とはいえない。だから彼女らは、古いポンコツからの差別的な侮辱を恐れてそのことを秘密にしていたんじゃろう。
彼女らが知り合っていたのは、リリーは時たまアランの研究室を訪れていたことや、アランとは百合を通して以外にほとんど繋がりのない宮島があのトリックを思いついたことから想像できたがな……ふむん、知り合いどころか恋人同士であるなんて思いもしなかった」
宮島はこれを知って憤慨したらしい。自分ではなく、女であるリリーを選んだことを許せなかったのだ。彼は古い時代の人間だった。
こうして恋愛感情は憎しみへと変化し、やがて有川とリリーに対する殺意が実った。さらに、人でなしのトリックを思いついてしまった彼は、それを実行に移そうと様々な計略を巡らせていったのだ。
「まず、宮島智雄はリリー名義で百合へ脅迫状を送った。それを受け取った彼女は狂ったストーカーの存在に怯えるようになった。そこへ宮島は、すかさずボディーガードとして恋人役を演じることを申し出て、見事彼女につきまとう口実を得たわけじゃ。もちろん、表面上は何の恨みも持っていないように振る舞っていたからこそ為せた業じゃな。百合としては、既にリリーという恋人がいるにもかかわらず、演技とはいえ彼を恋人役とするのは複雑な思いだったじゃろうが、命には代えられないと割り切ったのじゃろう……」
そう割り切ってしまったからこそ、今回の事件は起きてしまった。死が百合とリリーを、文字通りバラバラにしてしまった。皮肉とはまさにこのことだ。
グラスの中のウィスキーを一気に飲み干した伯父は、黙って立ち上がり酒瓶が詰まった戸棚の前へ向かった。そしてその中から巨大なボトルを取り出して、再び暖炉の前へ戻って来た。炎の照らされた顔は真っ赤に染まっているように見えたが、それはアルコールのためなのか炎の色が映ってなのか判断できなかった。ボトルからグラスへウィスキーをなみなみ注ぐと、伯父はまた唸る。
「全く、胸糞悪い事件じゃったよ。悪戯に複雑でややこしいし、わしはもうこりごりじゃ。あの犯人とはもう二度と顔を合わせたくないものじゃ……いや、奴とはもう顔を合わせることはできなかったな。わしが屋敷まで乗って来た馬――名は虐殺器官というんじゃが――に蹴り飛ばされて崖から転落し、そのまま死んだんじゃった。……ふむ、なるほど、これは中々、奴に見合った最期だといえるんじゃないかね」
何故ですか、と僕は問うた。
それに対して伯父はにやりと笑うと――その笑みにはどこか道化じみた、哀しみみたいなものが隠れているように思えた――いつもの怒鳴り声で答えた。
「何、決まっているじゃないか。奴は、いわば百合とリリーの仲を邪魔したわけじゃよ。それならば、馬に蹴り飛ばされるのはもはや必然といってもいい。昔々からよくいうじゃろう。
人の恋路を邪魔する者は、馬に蹴られて死んじまえ」

了

G船上の犬たち

時計を見た。

「十一時半（オンザールエドワミ）……」

――『亜愛一郎の狼狽』泡坂妻夫

登場人物等

俺……語り手
植田……その連れ
小池……その知人
豊島……その友人
アイーダ……その飼い犬
老津……その初対面の旅行者
神戸……その元妻
その他乗務員

乗用車 （含運転手）	3m まで 4800 円 超過は+1200 円/m
二輪車	1800 円
大人	1500 円
小人 （小学生以下）	750 円

未就学児は大人一人につき一人まで無料
付き添いがない場合は小人料金とする
犬猫の客席への持ち込みもこれに準じる

八場置氏

I岬	T港
8:00	8:00
10:30	10:30
14:00	14:00
16:30	16:30
☆19:00	☆19:00

☆は土日祝日並びに繁忙期のみ

＊　＊

風変わりな旅行だった！

M湾を渡る定時フェリー上で嗅ぐ潮の香りは殊更強く、風が吹かずとも辺り一面に漂っていた。I岬にともったばかりの灯台の明かりがぼんやりと目に入る。このままでは雨が降りそうな様子だった。

本日の第四便、I岬からT港まで運行するこのG号上の滞在は、予定通りなら二時間と少しの船旅となるだろう。船は終始ゆったりした速度で海上を進んでいる。

俺の隣には植田笑里がベンチに腰掛けていた。

俺が彼女と出会って六度目の春である。彼女がいまだに独身であるのは俺にも責任があるといって言えないわけはないのであるがその話はいいだろう。

甲板にはベンチが設置されてはいるものの、俺たちのほかに客はいないようだ。そもそも客が少ないようではあるが、大方、みな、客室の方にいるのだろう。

「ねえ、これなんて読むんだろ？」

笑里が俺に話しかけてくるが、どうにも学がないのでわからない。

よく読めないが、どうやら船の手すりに取り付けられているプレートに、「砂滑が見られることがあります」と書かれているようだ。

俺が首をかしげていると、そこへ、四十手前と思しき男が割り込んでくる。

「スナメリが見られることがあります、ですね。スナメリはネズミイルカ科のスナメリ属で小型のイルカです。アジアで広くみられ、M湾では一年を通して生息が認められています」

こいつ、差し詰めインテリだな、と思ったが俺たちは何も言わない。
何も言わないでいるとヤツは鼻を鳴らしてとっとと立ち去ってしまった。
後には俺たちが残された。春先の潮風はまだまだ冷ややかだ。
「じゃ、客室でも行こうか」
そうして俺たちもカラカラと客室に向かうことになったのだった。

客室内に客は少なかった。
しかし、犬はいた。トイ・プードルである。
この船室に犬がいようと（向こうは俺のことを気にするのかもしれないが）少なくとも俺は気にしない。
「へえ、ペットの持ち込みが許可されてるんですか」
さっきの男――あとで老津と名乗った――がまた近寄ってきた。どうにも落ち着きがない人間だ。
「ああ、ケージに入れてればいいみたいですよ」
その言葉に俺も鼻を鳴らして、適当に応えておいた。
このプードルもキャスターのついたケージに入れられていた。船の乗船規則上問題はないのだろう。
「すみません、アレルギーかなにかお持ちですか？」
いかにも申し訳なさそうにプードルの飼い主が低い背丈をさらに縮めた。
彼は、『豊島』とデカデカと書かれたスーツケースを持ち歩いていた。
「いや、僕の持病は花粉症くらいなものですし、薬も飲んでますから大丈夫ですよ。この犬も、躾が行き届いているみたいですし」
老津はそう受け答えたものの、ケージの中にいながらうろうろと落ち着かない様子のプードルに躾が行き届いているとは俺にはとても思えなかったが、黙っておいた。
老津の話によると、女房が海外旅行に行くというのでアイーダと名付けられたその飼い犬を連れての旅になるが、鬼の居ぬ間にちょっと関西の知人を頼って観光旅行に向かうそうだ。
流石の俺でも時計の針くらいはきちんと読める。
時刻は十七時を回ろうとしている。ようやく一息ついた。
俺と向き合うようにして座席へと腰掛けた笑里は、クッキーの小袋を二つ開いた。決して物欲し気な仕草をしていたわけではないのだが、俺にも少し分けてくれた。甘味と香ばしさの混じった普通のクッキーである。そうして、こっちは駄目、といいつつ、黒っぽいもう一つの方まで全部平らげてしまった。
この船旅は一部例外を除いて比較的穏やかになると思われた。
その予想はぶち破られることになる。案の定である。
「豊島！　電池持ってへんか？」
耳をつんざくような大声が聞こえたかと思うと、巨体が上の階へと続く階段から現れた。なんでも、上の階には特別室なるものがあるらしく、その窓からは多少良い景色が見られる作りになっているらしい。しかし、事前予約が必要らしく、少し面倒であるそうだ。さらには、特別室に関する規則はあってないようなものであり、甲板から上の階へと続く階段を使うことで行けないこともなく、使いたいものが勝手に使えばいい、という風潮のようだった。
さて、大声の巨体の話である。どうやら、携帯の充電が切れてしまったので、持ち運びの効く充電器を使って充電したいようだ。
そのことを乗客全員が悟ってしまうほどにその大声はやかましく繰り返されたのであるが、内容は右の通りであり、ここでは省略したいと思う。
どうやら、その男、小池はすでに出来上がっているようで、豊島が自分のために電池を持っていることを当然だと思っているようだ。その傍らにはコニャック、青のマーテルを抱えているようだ。
「電池は持ってないですよ」
と、豊島は敬語で答えるが、
「何故だ！」
と問い返してしまい、一向に話は進まない。船内の売店にも乾電池は置いてなく、小池が諦めて上の階にようやく戻っていった時には、船客全員が疲れてしまっていた。
その時、小池から目をそらし気味にしていた俺たちと、後ろの席に座った、帽子を深くかぶってマスクをかけている女との目があった。
いかにも怪しげな風体をしたその女性は、
「神戸といいます」
と名乗った。
「あの、老津と言う男がおりますが、あの男とちょっとした知り合いで、でき

れば顔を合わせたくないんです」
と、風体の言い訳らしいことをつぶやいた。
「大丈夫ですよ。私も小池さん、あ、さっきの声の大きい人ですね、と、以前フラメンコ教室で散々顔を合わせたことがありますから」
と、笑里までが言う。
なんてこったい。
結局、神戸は旅を通してずっと室内に引きこもっていたようだ。
知り合いの糸は乗客の間においてだいたい連結してしまったらしい。
不吉な船旅になりそうだった。

＊　＊

（G船上の風景　その1）
「あれがK島ですね」
時刻は十七時半。甲板上で老津が豊島に語りかける。
「K島……ですか？」
「そう、あれが『潮騒』の舞台になったともされる島です」
「はあ……」
その時ポツリ、と水滴が落ちた。
「ややっ。降ってきましたね。客室の中へと戻りましょうか。僕は仮眠も取りたいですし」
「はいはい、そういたしましょう」
甲板の一部に屋根はあったものの、二人は足早に客室へ戻ることにしたのだった。

（G船上の風景　その2）
「雨が降りそうですね」
空模様は昼過ぎからぐずぐず言い続けている。
先程から話し込んでいた植田と神戸は客室の窓から外を見上げた。
星は見えなかった。
「じゃあ私は少しお手洗いに立ちますね」
「はいはい」
時刻は十七時十五分を回っていた。

（G船上の風景　その3）
四階の船長室脇において副船長はひとつ欠伸を噛み殺した。
船は定刻通り、今日担当した他のすべての便とほぼ同じ速さで船は進んでいた。なにもかも普段通りのように思われる。
変な好奇心を持った客がこっちまで登ってくる、等ということもなく、今日一日の仕事も無事に終わりを迎えられそうだ、と彼は思った。

（G船上の風景　その4）
小池は殴り殺された。ほぼ即死である。
室内の時計は小池が殴られたその時、十七時十五分を指していた。
そのG号の、特別室の窓の外には、T港からI岬へむかうF号の姿があった。

＊　＊

時は進んで時刻は午後十七時五十分。
乗客はてんでバラバラに動いている。
そろそろ晩飯の時間かな、と俺が立ち上がるのと同時に笑里が売店から戻ってきた。
「晩御飯の時間ですよー」
ご機嫌だった。
俺のウン倍量を完食した笑里はバッグ片手に食後の煙草に出かける。
後方の座席で寝ていたと思しき老津が起き上がって大きく伸びをした。
「う、うーん。よく寝ましたー」
すると、俺の後ろの席に戻ってきていた神戸がそっと立ち上がり、特別室へと向かった。うまく逃げたな、と俺は思ったがもちろん黙っておいた。
「やあ、いい朝ですね。船の上はよく寝れるものですね、知りませんでした。知らざるを知らずと為す、是知るなり。ですかね。これは論語の言葉です。余計な言葉かもしれませんが」
全くもって大きなお世話だ、と俺は唸ったが、反撃は特に何もしなかった。
そこへ笑里が、タバコの臭いなんかをプンプンさせながら甲板から戻ってき

た。悲鳴が上がる。すぐ階上の三階からだ。
「うん？」
と訝しげな顔をした老津が特別室へと上がっていく。
豊島がトイレの方角から戻ってくる。
「なにがあったんでしょう？」
「さあ？」
しばらくすると、副船長が顔を出した。
「大変申し訳ありません。上の階で小池様が怪我をしておられます。もうしばらくしますと、当船はT港へ到着いたします。が、お客様の中にお医者様はいらっしゃいませんでしょうか」
一同に反応はない。
「小池さんが？」と笑里が尋ねると、
「私はずっと四階の甲板におりまして、五人の乗客の皆様の顔は一切拝見してないのですが、小池様は常連でいらっしゃいましたので顔は覚えさせていただいております。確かでございます。」
俺は頭を掻き毟る。
やがて、老津と神戸が戻ってきた。
「あれは、殺されてますね。室内に凶器らしきものはないようですが」
一同は混乱に陥り、各々のアリバイの確認らしきものまで行ったが、笑里と神戸が十七時からの二十分間話し込んでいたこと、老津と豊島は十七時半頃には甲板に出て世間話かなにかをしていたこと、くらいしか確認できなかった。
凶器にふさわしいだろうと思われるものも見当たらず、自らの無実を示そうと行われた持ち物の開示も徒労に終わる。凶器らしきものは見つからなかったようだ。
犬が言葉を話せるならばな、と俺はずっと客室に置かれていたプードルの方を見ながら思う。
「この中に、何か小池さんの死に関わった人がいる可能性は否定できません！」
そう老津が言うと、全体に悲愴げな空気が漂う。
この船にはどうにも鈍い人間が多いようだ、と俺はそっと一つ欠伸をした。

問
かつてトマス・ド・クインシーは、大衆は推理家としては、からきしだめだ、と、書いた、とかつてエラリー・クイーンは書いた。それぞれから一世紀が経とうとしている現在、あなた方はどうか。
語り手は如何にして犯人を推定し得たのか？　擬似論理的に指摘し、答えよ。
犯人は冒頭の登場人物表に挙げられた、乗務員以外の人物のうちのいずれかであり、事前事後にかかわらず単独犯であることはここで保証する。
また、地の文に嘘はなく、犯人以外は虚偽の申告をしていない、と近似して良い。

答え

自然は飛躍しない。　　――ライプニッツ

簡単な話である。売店から戻ってきた笑里の手からは、コニャックの香りがはっきりと漂ってきたからである。撲殺の凶器が特別室から消えているとなれば、彼女が犯人で、痕跡が残ったかもしれないマーテルの瓶を甲板から海に捨てた、としか考えられない。

殺された小池と彼女との間に何があったのかは知らない。しかし、犬は三日の恩を三年忘れない。犬であるところの俺は彼女を守りたいと思う。

遠く波の音が聞こえる。港が近づいてきたようだ。

【作者より】

植田が犯人であること。特別室の時計が（小池のせいで）止まっていたこと。

語り手が犬、もしくはそれに類する動物であること。

以上の三点をすべて指摘した解答を完全解答とする。

鹿野師実のアンフェアなランチタイム

小浜百

年齢不相応な男だ、というのが阿久将生の感想だった。

鹿野師実のことだ。〈かの・もろざね〉。ずいぶん古めかしい名前だが、昭和生まれの平成を生きる現代人である。

今年で五十三歳になると聞いているが、その振る舞いは小学生なのではないかというほど、我儘でマイペースなところがあった。精神年齢は十歳程度で成長が止まってしまっているのかもしれない。とてもではないが、自分より二十歳以上も年上の人間だとは思えなかった。

鹿野師実と阿久将生。彼らは共に警視庁捜査一課に属している。階級は鹿野が警部、阿久が巡査。鹿野は阿久の直属の上司にあたる。

このとき、鹿野と阿久は警視庁の近くにあるレストランに来ていた。こぢんまりとしていて目立たないが、インターネット上ではオムライスが美味しいお店として有名らしい。

ドレスコードのあるような高級レストランではなく、リーズナブルな全国チェーンのレストランなのだが、普段、牛丼屋や立ち食い蕎麦で昼食を済ませている阿久にとっては、居心地のよい店ではなかった。周りを見回しても、若い女性が殆どで鹿野と阿久のようにスーツ姿で男二人連れ、という客は見当たらない。

やっぱり定食屋あたりで手を打ちませんか――店に入る前から、阿久はそう提案したかったのだが、相手は一応、警部。その階級差を考えるとなかなか言い出しにくかった。

「ここね、オムライスもいいんだけど、ランチセット限定のデザートがまたいいんだよ。ミニパフェってやつ」

「俺、パフェとかあまり好きじゃないんですけど……」

「じゃあ、僕にちょうだい。かわりにスープあげるから」

僕、コーンスープって嫌いなんだよね、美味しくないよ、あんなのどこがいいんだろう、と鹿野はかくん、と首を傾げた。確か、阿久の先輩であり、鹿野の部下である平澤巡査部長が大のコーンスープ好きだったはずだ。この場に平澤がいたら、乱闘が始まっていたかもしれない。

「わあ。〈冬季限定あったかランチセット〉だって。すごく美味しそうじゃない？これにしようっと。阿久君はどうする？」

鹿野に言われて阿久は、メニューをぱらぱらと捲ったが、

「わからないんで、警部と一緒のにします」

「なにそれ。面白くないなあ」

不思議そうに首をかしげる鹿野。その表情はどこか、ペンギンを思わせるものがあった。人より厚い唇や、ぼんやりとした眠たそうな目のせいかもしれない。脂気のない黒髪は、鳥のひなの頭のようでもあった。鹿野の動きに合わせて、ふわふわと揺れている。

鹿野はウェイトレスを呼び止めると、〈冬季限定あったかランチセット〉を二人分、注文した。普段、〈牛丼〉とか〈ぶっかけ蕎麦〉なんてものしか注文しない阿久にとってはなんちゃらランチセットなんて、聞いたこともない外国語のようなものだった。

ウェイトレスが行ってしまうと、鹿野はふふーん、と楽しげにソファに凭れかかって、

「阿久君とランチするのは、初めてだね」

「……そうですね。自分が捜査一課に配属されてから、まだそんなに経っていませんし」

「半年だっけ」

「ええ」

「じゃあ、まだ知らないことだらけってワケだ」

「そうですね」

「じゃあさ、面白い捜査一課の話、聞かせてあげようか」

「は、はあ……」

鹿野は刑事生活のほとんどを、警視庁の捜査一課で過ごしてきたと聞く。当然、阿久よりずっと捜査一課については詳しいだろう。しかし、〈面白い話〉とはいったい……

「〈当時の捜査一課全員そろってコートジボワールに左遷されそうになった話〉か〈今の刑事部長が捜査一課刑事だったころ僕に惚れて猛アタックしてきた話〉か〈ダイイングメッセージが残っていた事件の話〉、どれがいい？」

「……三つめの、ダイイングメッセージのやつで」

一つ目と二つ目も気にならないわけではなかったが、一番、今後の仕事に役

立ちそうな話を選ぶことにした。
「ところで警部、今の刑事部長って女性でしたっけ」
「いや、男だよ」
そういうことがあっても不思議ではなかろう。深入りはしないことにした。
「それで、ダイイングメッセージの話って？　何なんです？」
「うん、そこに行く前に、その事件の関係者の名前を教えておこうか」
そう言うと鹿野は、スーツの内ポケットから手帳とボールペンを取り出した。そこになにやら書きこむと、そこのページを破り取って阿久に差し出した。
〈城ヶ崎尚文：被害者、大学教授
容疑者
1、中居子規：小説家
2、宝田いずも：学生
3、溝端一生：大学非常勤講師〉
「警部、字、お上手ですね」
これはお世辞ではなく、本音だった。もっと乱雑な字を書くと思っていたのに、メモの切れ端に記された文字は書写のお手本のように形が整っていた。
鹿野は「そりゃあ、そうだよ」と嬉しそうに胸を張った。
「僕は書道六段だからね」
「そうなんですか」
書道教室を二週間でやめてしまった阿久にとっては、書道六段なんて未知の世界である。
「ちなみに剣道は三段、合気道四段だよ」
「へえ」
それはすごい。特にこの年代で剣道三段なら、かなりの腕前なのではないか。
「さらにバリツもできるよ。なんてったって、僕は日本バリツ連盟名誉会長だからね。バリツさえあれば、どんな状況からも生還できるんだ」
「……へえ」
バリツって何だ？　マットの上でやるやつか……？　阿久の頭の中では今、鹿野が一生懸命、倒立にチャレンジしていた。
「それで、これが事件関係者だったというわけですね」
「そう。実在の人物だから、声に出さないでよね」
じゃあ、そもそも、こんな誰が聞いているかわからないような場所で、事件の話を持ち出さない方がいいのではないか、と思ったが口には出さなかった。
「犯人はこの三人の中にいるんですね？」
「うん。この被害者は自宅の書斎で殺されたんだけど、その家と言うのがセキュリティ万全でね。窓ガラスを割ったり鍵をこじ開けようとしたりしたものなら、即座に警備会社に通報されるシステムになっていた。その痕跡がなかったことから、当時、この家の中にいたこの三人のうちの誰か、ということになったんだ。玄関のところにつけられていた防犯カメラも確認した。訪問客はこの三人だけだった」
「それぞれのアリバイは？」
「全員ないよ。それぞれ別の用事でやって来て、別々の部屋で待たされていたらしい。第一発見者は一番の小説家。彼は資料室にいたんだが、そこで資料を読んでいる最中にインスピレーションが湧いたらしくてね。はやくプロットづくりに取り組みたいから、また出直すことにすると挨拶するため、書斎に行って被害者を見つけた、というわけ。被害者は後頭部を花瓶で殴られて死亡していた」
「ダイイングメッセージは？」
「カレンダーだよ」
「カレンダー？」
「うん。事件が起きたのは十月上旬だったんだけど、書斎にかかっていたカレンダーは十一月と十二月の分だったんだ。ああ、そのカレンダーは一ページに二か月分、印刷されているやつでね。で、九月と十月の分はどこへ行ったんだ、と探したら、なんのことはない被害者が握っていたんだ。ちぎりあとが汚かったから、殴られた後に破ったのだろうということになった。そんなことをするのは不自然だろう？」
「そうですね。カレンダーを破ってる暇があるんなら、助けを呼べばいいのに」
「助けを呼びたくても呼べなかったんだよ。書斎には電話の類は一切なかった。しかも書斎は家の中の、一番奥まったところにあってほかの客人がいる部屋まで、そこそこ距離があったんだ。自分の死を覚悟した被害者は、せめて自分の殺した犯人の名前を告発しようとして、ダイイングメッセージを遺した」
「それがカレンダーですか」

阿久はメモを見ながら、「それにしても」と首を傾げる。
「犯人も、被害者がカレンダーを破っているところを見て、なんとも思わなかったんでしょうか？　怪しいでしょう、死にそうになってるのにカレンダーを破ったりするなんて。とどめをささなかったんでしょうか」
「犯人の方も慌ててたんじゃないかな。いつ、誰が来てもおかしくない状況なわけだし。被害者は犯人が部屋を出ていってから、カレンダーを破ったんだろう。朦朧とした意識の中、必死にダイイングメッセージを残す被害者。泣かせるねえ。カレンダーのかかっていた壁には、被害者の血がついていたよ。壁に凭れかかるようにして、やっとのこと立ち上がって、カレンダーを破ったんだろうね。カレンダーの方にも、少しばかり血がついていたよ。不必要な汚れをつけないよう、頑張ったんだろうなあ」
　ま、僕が被害者ならバリツで犯人を返り討ちにしただろうけどね、と意味の解らないことを付け足す鹿野。
「ね、ところでさ。ダイイングとダイニングって、似てない？　僕、いつも間違えそうになるんだけど」
「……文字面は似ているかもしれませんが、全くの別物じゃないですか」
「そーお？　最近、なんとかイングばかりで、ややこしいよねえ」
　このまま、ダイイングとダイニングの話をしていてもキリがない。相手が鹿野となれば尚更だ。阿久は無理やり、話題を変えた。
「カレンダーはどんなものだったんですか？　その三人の内、誰かから贈ってもらったものとか？」
「いや、そうじゃない。カレンダーは、生命保険会社が年の初めに加入者全員に配っているものだった。ほら、あるだろう。会社名が入っていて、担当者の連絡先のシールが貼ってあるやつ。鳥の写真がついているやつだった」
「何か、カレンダーに書き込みは？」
「なかったね。予定はカレンダーではなく、スケジュール帳に書き込むタイプだったらしい」
「そうですか……」
　阿久は手元のメモを一瞥したのち、思いついたように、
「さっき、鳥の写真だっておっしゃいましたけど、何の鳥だったか、覚えていらっしゃいますか？」
「え？　九月と十月には、なんちゃらペンギン、十一月と十二月は、なんとかペンギンだったと思うけど、忘れちゃった。ペンギンって、皆、一緒に見えるんだもん」
　それは〈鳥の写真がついているカレンダー〉ではなく〈ペンギンの写真がついているカレンダー〉と呼ぶべきではないのか。
「どうして？」
　阿久の質問が意外だったらしく、鹿野は不思議そうに首を傾げた。その反応からして、自分の推測が外れたことだけはよくわかった。的外れな推理を口にする恥ずかしさを覚えながら、阿久は説明する。
「いえ、一番目の人、名前が鳥の名前だから……これ、ホトトギスって意味でしょう、だから……」
　ホトトギスの写真だったなら、そのまま、この一番の小説家を示していることにならないかと思いまして、と言い切ることは出来なかった。〈ホトトギス〉と言った瞬間、鹿野が阿久の脛を思い切り蹴りつけたからだ。
「僕は、小学生の時、ホトトギスのせいで雪崩にのみ込まれかけて以来、ホトトギスは嫌いなの！」
「は、はあ……すみません」
　いったい、どんなシチュエーションなんだと思いつつ、疑問は胸の内に仕舞って素直に謝る阿久。
　鹿野はふん、と鼻を鳴らすと、その時ちょうど運ばれてきたオムライスを頬張り始めた。オムライスを包み隠すように、ホワイトソースがたっぷりかかっている。
「一番の人は、犯人じゃないよ」
　あっさり、選択肢を三分の二に絞る鹿野。つまり、宝田いずもか溝端一生というわけだ。しかし、どちらの名前も一見すると〈カレンダー〉に関係しているとは思えない。
「名前だけでわかるんですよね。趣味とか、ここに書かれていない情報に基づかないといけないということは、ないですよね？」
　阿久の問いにこくこくと頷く鹿野。オムライスを口いっぱいに頬張っているので、しゃべることができないのだ。
　だいたい、一口に〈カレンダー〉といったって、どこにキーがあるんだ？　〈カ

レンダー〉なら何でもよかったのか？　それとも、このカレンダーだからこそ意味を成すのか？
「阿久君、食べないの？」
鹿野に訊ねられても、阿久は無言。ダイイングメッセージの解答を考えるのに必死で、周りが見えなくなってしまっていた。
その態度を鹿野は自分に都合のいいように受け取り、
「じゃ、貰うね」
と言って、自分の空になった皿と阿久のオムライスが乗った皿を交換した。ついでに紅茶が入ったカップも自分の方へ引き寄せる。それから「これはあげる」と言って、スープの入ったカップを阿久の方へ押しやった。
自分のオムライスと紅茶がコーンスープに変わってしまったことにも気づかず、阿久は考え続ける。
九月か十月に関係があるのか？　誕生日？　いや、さっき、ここに書かれている情報だけで解けると言っていたから、それはない。九月は英語でSeptember、十月はOctober……十一月はNovember、十二月はDecember……だめだ、何も見えてこない。旧暦にすると九月は長月、十月は神無月、十一月は霜月、十二月は師走……だめだ、やっぱりなにも……いや、待てよ。
阿久はふと、中学の時に聞いた国語の教師の話を思い出した。
――神無月は神様のいない月と書きます。これは、神様が出雲大社というところへ行ってしまい、その時は神社に行っても神様がいらっしゃらないから云々。
神有月がどう、とかいう話もしていた気がするが、そんなことは、今はどうでもいい。そうだ、旧暦の十月の話をする時に、あの教師は〈出雲大社〉と言う言葉を使っていたではないか。そして今回の容疑者の一人、〈宝田いずも〉。
「警部！」
阿久が自分の世界から現実に戻った時、鹿野はちょうど二皿目のオムライス（阿久の分である）を食べ終えたところだった。
「ん？　わかった？」
「十月は旧暦で言うと、神無月ですよね」
「うん？　そうだっけ？」
「……神無月には、神様が皆、出雲大社へ行ってしまうって言いますよね」
「あっ、それ、聞いたことある。漫画で読んだよ。タイトル忘れたけど」
無邪気にはしゃぐ鹿野を見て、だんだん不安になってくる阿久。もし、自分の説が正しければ、鹿野も〈十月（神無月）〉と〈出雲大社〉を繋げることができるはずだからだ。
「被害者がちぎって握っていたのは、九月と十月分でしたよね。それで、十月は〈神無月〉。〈神無月〉から〈出雲大社〉を連想することは難しくないと思うんです。だから、二番の人が犯人……」
「はずれ！」
嬉しそうに両掌を天井に向けて万歳をする鹿野。
「二番の人が犯人じゃないってことですか？　それとも、根拠だけ違うってことですか？」
「二番の人は犯人じゃないよ」
「てことは、三番の人が犯人ですか」
「よくわかったねえ」
くるんと大げさに目を見開く鹿野。馬鹿にしているのか、それとも本気でそう言っているのか判別がつかなかった。
「じゃあ、そのダイイングメッセージでどうやって、犯人の名前をあらわしていたのか、わかる？」
阿久は〈溝端一生〉という文字を、ぐっと睨み付ける。この名前と〈カレンダー〉をどうやって繋げればいいんだ……だいたい、この名前、なんて読むんだ。苗字のほうは〈ミゾバタ〉だとしても、その下は〈イッショウ〉とでも嫁というのか。それとも、〈カズオ〉？　〈カズキ〉？
その時ちょうど、セットメニューのデザートが運ばれてきた。紙の切れ端を睨み付けながらウンウン唸っている阿久を不審そうに横目で見ながら、ウェイトレスはデザートをテーブルに置いて去って行った。
「阿久君、パフェ、いらないよね。もらうね」
鹿野の言葉は阿久の耳には入っていなかった。もともと、阿久の返事に関わらずデザートを二人分食べるつもりだった鹿野は、気にすることなく阿久のパフェを自分の方へ引き寄せる。
〈溝端一生〉と〈カレンダー〉をどこで繋げるか……〈カレンダー〉という単語からは、見出すことができない。それぞれの月の言いかえもダメだった。鳶や鷹からも、無理だろう。カレンダーに書き込みはなかった。……ほかに特徴

といえるものは、生命保険会社から貰ったものだというくらいか。……そういえば、社名が印字されているとか言っていたっけ……。
「警部」
「ん？　パフェならもう、食べちゃったよ」
見れば、鹿野は二人分のパフェを食べ終わり、ナプキンで口の周りをぬぐっているところだった。
「パフェはどうでもいいです。そのカレンダーをくれた生命保険会社の名前、わかりますか？」
「えー？　なんだったかな、日本生命とか、そんな名前だったと思うけど」
「第一生命とか、じゃなかったですか」
「違ったと思うけど。一とか二とか、数字はなかったよ、確か」
「そうですか……」
もし〈第一生命〉と書かれていたのなら、その文字列の中に〈一生〉という文字が隠れているから、そこがダイイングメッセージとなった可能性もあったのだが……。
「警部」
「ん？」
「降参です」
阿久は短くそう告げると、疲れたように肩を竦めてみせた。目の前に置かれているスープをすする。スープはすっかり冷めてしまっていた。……そういや、俺のオムライスはどこへ行ってしまったんだ？　そんな疑問が頭の中に浮かび上がる。……無意識のうちに食べてしまったのだろうか……？　というか、なんでスープのカップが二つもあるんだ……？
それに対し鹿野は、楽しそうにクツクツと喉を鳴らして、
「まあ、わからないだろうねえ。ダイイングメッセージ、被害者が示したかったものは、十一月、十二月のページにあったんだよ」
「手に持っていた九月と十月の方ではなく？」
「そう。それは、邪魔だったから、引きちぎっただけ」
つまり、九月、十月のページにはなくて、十一月、十二月のページにはあるものがあったということか。……しかし、どこに？　十一月にしろ、十二月にしろ、〈溝端一生〉に繋げることは難しそうだった。それとも、英語や旧暦ではなく、フランス語やドイツ語に直さなくてはならなかったのだろうか。
しかし、鹿野が示した〈解答〉は予想とは全く異なるものだった。
「最初に言っただろ。カレンダーには担当者の連絡先が書かれたシールが貼られていたって。当然、そこには担当者の名前も書かれていた。その担当者の名前が〈溝端〉さんだったんだよ。三番目の人と同じ苗字。もちろん、赤の他人だけどね」
「は？」
「そのシールっていうのが、一番最後のページにしか貼られていなかったんだな。まあ、この節約第一の時代に、すべてのページにシールを貼っていたら、その分の経費もばかにならないだろうしね。まあ、つまり、被害者はその最後のページが警察の目につくようにするために、わざわざ九月と十月のページを破り取ったってわけ。ご丁寧に、シールの部分が血で僅かに汚れていたよ。自分がシールの名前を指し示したかったと、わかりやすくしようとしたんだね」
「そんなの、聞いていませんよ！　担当者の名前が〈溝端〉だっただの、シールの部分に血がついていただの！」
「そりゃあ、そうだよ。言ってないもん」
「そんな情報不足の状態で、わかるわけないでしょう。アンフェアです」
「いつ、僕がフェアな問題を出すって言ったかな？」
ふふん、と憎たらしい笑みを浮かべる鹿野。ただの開き直りだ。
「こういう問題を出すときには、ふつうフェアにやるものでしょう」
「でも、シールに書かれた名前や、そこに血がついていたことを言ったら、すぐにわかっちゃうじゃないか」
「そうかもしれませんが……」
やはり納得のいかない阿久。
一方、鹿野は食べたいものを食べたいだけ食べて満足したらしく、
「さあ、お昼休みもそろそろお終いだよ。戻ろうか」
と言いながら、膝にかけていたコートの袖に腕を通し始めた。真っ黒い、丈が踝まであるロングコートだった。
「そういえば、この事件のときも、このコートを着てたなあ。これ、買ったの、十年前なんだよね」
「そんなに長い間、着てるんですか」

「うん。体型が変わっていないってことだよね。昔から食べても太らないんだよね、僕」
自慢げに胸を張る鹿野。確かに顔の輪郭は丸いが、太っているというほどではない。年齢を考慮すれば、標準的な体型といえる。しかし、体型が変わっていない、という割にコートの前ボタンをしめようといないのは、腹回りがきつくなってとめられないからではないのか、と阿久は思ったが口には出さなかった。先輩刑事の平澤なら、ずばり、そのことを指摘していただろうが。
「それじゃ、外で待ってるから。ごちそうさま！」
コートの裾を翻すと、鹿野はさっさと店の外へ出ていった。当然、二人分の伝票はテーブルの上に置きっぱなしである。
「ちょっと警部！」
阿久は慌てて目の前のスープを飲み干すと、伝票片手に席から立ち上がった。
「警部！　自分の食べた分は自分で支払って下さい！　アンフェアですよ！」
おわり

霧消する小屋

蒼田雅翠

軽車両がソメイヨシノを両脇に抱えた道路を進む。こちらの車幅だけで道路は埋め尽くされている。対向車両が来た時のために設置してある、若干道路幅の広いところ以外では、乗降すら出来るか怪しいほどだ。

そのおかげで、両脇に満開となったソメイヨシノは否が応でも視界に入る。この細い山道に入ってからというもの、車内の人間は細い枝についた可憐な花しか見ていない。そのせいか、車内は山道に入った時の歓声をすっかり忘れていた。

四月三日、友人である大学生三人とその知人であるマジシャンは、車を進ませる。蛇のようにうねうねと曲がった道を進む車のハンドルを握るのは、新大学三回生の江田万司である。

その助手席に座るのは、その友人、安本徹、助手席の後ろには同じく新大学三回生で友人の小沢万里。

そして、運転席の後ろに座るのが今回の話を持ち込んだマジシャンの里中である。

こうして四人が江田の運転で四苦八苦しながらたどり着こうとしているのは、里中の根城となっていた施設だ。資産家であった彼の父親が残した小屋が、何とも通常では考えられない造りとなっており、それを聞いた三人が里中に何とか頼み込んで連れて行ってもらうように約束を取り付けた。

春休みの内に行くことも出来たが、山道のソメイヨシノの見頃に丁度予定が合い、今こうして頂上へと車は進んでいる。

「あと二十分ぐらいで到着するかな。最後の登り道を頑張って」

と運転席の後ろから前へと声が送られる。それに

「まだ二十分もあるんですか。もう勘弁してくださいよ」

と江田は返すことしか出来ない。

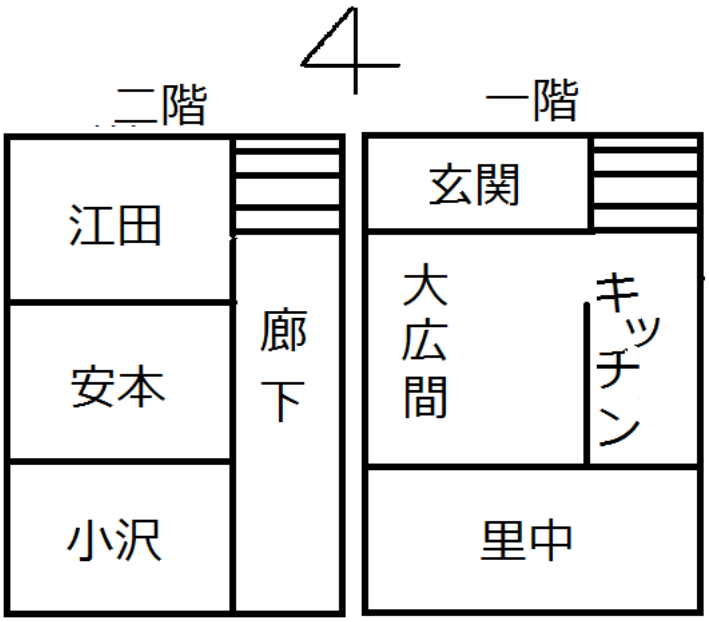
そして二十分後、見慣れたソメイヨシノの景色が途切れたのが合図となり、目的の建物へと到着した。里中の指示に従って車を誘導し、大きい方の建物の脇に江田は車を止めた。

里中は、それぞれ一泊分の荷物を部屋に入れ、再び一階の大広間に集まるよう伝える。二階建ての大きな屋敷の方が四人の宿泊場所である。（図一参照）

建物の階段は玄関すぐの左手にあり、二階は長い廊下と部屋が三つあるだけだ。部屋の配置は手前から江田、真ん中が安本、一番階段から遠いところに小沢となった。

里中は一階の大広間の奥にある若干広い一人部屋だ。一回の大広間にはカウンターキッチンが備えられ、簡単な料理が出来るようになっている。

浴槽とトイレは各部屋に設置されており、共用のものはない。それぞれの西側の壁に一つ大きな窓があり、山頂付近でもソメイヨシノが存在感を示していた。



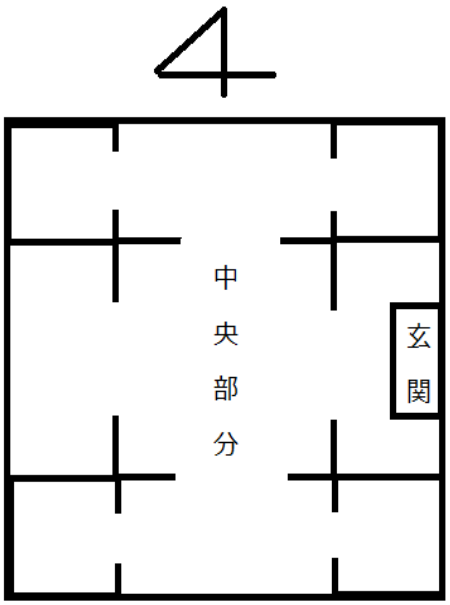
図一

だが、江田の部屋から見える景色にソメイヨシノはなく、白い小屋があるだけだった。

当初、江田としては窓の外にただ真っ白な景色があるという認識だったが、

他の部屋の様子を聞いて
「俺だけなんでそんな部屋なんですか」
と里中に注文を付けた。それに里中は
「その白い建物が君たちの見たかったものであり、マジックのためにつくられたものだよ」
と話題を別に振ってかわす。里中の話題転換に江田以外の二人は追随し
「そうやんか。里中家所有の面白(おもろ)い小屋を見に行かな」
「そうですよ、早くいきましょう」
と大阪弁丸出しの安本と標準語の小沢の答えが返る。
二階建ての宿泊用施設から出た四人は、江田の見た真っ白な小屋へと向かうべく外へ出た。玄関の左手三メートルに存在するその小屋は、大きな石棺のようにも見える。
里中の先導で小屋へと入る三人は、小屋のつくりに違和感を抱いていた。真っ白な外観の小屋の内部も真っ白だった、という点に加えて、である。
三人は一番奥の部屋まで誘導されると、小屋にくっついて動かない椅子に座るよう案内された。里中は、奥の部屋に準備をする、と言って道具を取りにいたようだった。
里中が準備を終えて出てくると、江田は早速抱いていた疑問を投げた。
「この小屋には、接合部分がないですよね？　全てが同じ材質で出来ている。いったいどういう建築方法で作られたんですか？」
里中は、ほう、と感心した様子で
「それはいかにも。この小屋は、全て大理石で出来ている。それも一枚岩のね。そして建築方法と言えば、大きな大理石の塊をくり抜いたのさ。そして、人が入れるようなスペースを作り、まるで小屋のようにしてしまったんだ」
三人はそれを聞いてもしばらくは理解出来なかった。果たして、そんな工法で作られた建物が安全であるかも分からない。
江田がそのこと里中に尋ねると
「この周辺は確かに周りよりも標高が高い。だけど、そんなに強い風は吹かないんだ。風力発電のための風車を建てようかと話が上がったんだけど、その時に風は対して強くないって分かってね。そのおかげでソメイヨシノも長持ちしているから、まあいいかって感じかな。
地震に関しても、活断層が走っていないし、何といってもこの小屋をつくっている大理石はこの山自体の主成分になっている。この山が倒れない限り、この小屋が倒れるようなことはないと言ってもいいかもね」
と返答。続く安本の
「そんなに大理石だらけなんやったら、切り出して商売しはったらどうなんです？」
という問いには
「もちろんそんな一般的なアイディアも挙がったんだ。ただ、ここまで来る道を見ただろう？　あれでも相当頑張って作った道なのに、軽車両が片側通行するのが精一杯だ。重機が入れない以上、大理石の塊を切り出すことが出来ない。
上からヘリで釣り上げるようなことも考えたが、とにかく重い。それに、一枚岩の大理石を重機無しで分割も出来なかったしね。
隣の二階建てを建てるのにも苦労したんだよ。基礎工事をして地盤を固めたあとは、最小限の資材しか使っていないし、屋根なんか風がないのをいいことに、軽量化のためジュラルミン板でつくったんだから。
それで、小屋の方も苦肉の策だ。職人と、出来る限りの工具を使って内部をくり抜いて、こんな感じにしたんだよ」
そう言って内部を見渡している里中だが
「私としては、不満だらけなんだけどね。親のやったことだから、まあ仕方ないと思うだけに今はしているんだけど」
と付け加える。それに
「確かにとんでもない小屋ですけど、よく実際にやろうと思いましたよね。それで、マジックはいつ始まるんですか？」
と小沢が言ったところで、里中は
「ああ、そうだったね」
と用意していたマジックの道具を開いて、幾つかの定番テーブルマジックを済ますと
「もうこれでよくないかい？　君たち私のマジックよりもこの小屋の方に興味を持っているようだし」
三人はその言葉に同意し、各々小屋の中に散った。小屋は一階建てというこ

とだが、ぶっ飛んだアイディアを持った里中の父も、二階をつくる勇気はなかったのだと江田は思っていた。
部屋は全部で五つである。（図二参照）
中央部分には小屋と一体化した動かない椅子が設置されており、他の部屋よりも大きくなっている。四隅に配置された他の部屋は、里中がマジックを行った部屋と同じつくりである。
大理石をくり抜いただけであるから、それぞれの部屋にドアなどはなく、ただの通路となっている。手作業のせいで、各部屋の大きさは少し違っていたが、誤差の範囲である。



図二

一通り部屋を見た三人は中央部分で感想を各々言い、再び驚きを共有した。
里中も合流し、江田からの質問を受け付ける。
「違和感があると思っていたのは、接合部分がないことの以前に、平衡感覚が狂わされていたんですね。この建物は、真っ直ぐに建っていない」
「結果としてそうなったんだけどね。中央部分が一番高く、外側にいくにつれて少し高さが低くなっているんだ。何か液体はないかい？」
里中のオーダーに、江田がペットボトルのお茶を手渡す。
「これをね、少し垂らすと」
そうして里中が床にお茶を垂らすと、中央部分から、部屋の端の方へとお茶は流れた。白い床に茶色の液体が流れていくので、三人はなるほど、と納得する。
他に聞かれるようなことが何もないと察した里中は、もう七時だよ、と言って晩御飯の準備をするため宿泊用施設へと戻った。三人も特にすることはなかったので、自室へと引き上げた。
三十分ほどで里中は準備していた鍋の用意を完成させ、三人を二階から下へと呼んだ。三人はすぐに下へと降りて自分の場所を確保する。
里中が火にかけていた鍋を大広間のテーブルへと運んだ時には、取り皿などの準備も既に済まされ、あとは食べるだけとなっていた。江田が里中の分の箸を手渡したとき、それは鳴った。
西側からサイレンが響いたのだった。何の音かと三人が思っていると
「化学工場があの方向にはあるんだけど、それかもしれない。何かヤバイ物質が漏れた時にサイレンがするって言っていたんだけど、大丈夫かな」
三人はそれを聞いて、大広間の西側にある大きな窓の方を注視する。しかし外灯はなく、化学工場で何かが起こっていたとしても把握出来ないと判断した。
里中は外気を取り込まなければ大丈夫だろうとエアコンを切って、換気扇を止める。それぞれ一つずつしかないので、他の三人は座ったまま里中を待った。
里中が戻ると、全員缶のままビールを持って乾杯となった。だらだらと鍋をつついていると、時刻は十一時になっていた。
まだ寝る時間じゃないと三人は冷蔵庫の中からビールの缶を出してきたが、里中は早々に自室へと引き上げた。残された三人も結局里中が部屋へと戻ってから一缶ビールを開けると、することもなく自室へ引き上げることにした。
自室に戻った三人は、就寝の準備を済ませるとすぐにベッドへと入った。エアコンをつけると、先程の化学工場から出ているかもしれない有害物質の影響を受けるかも、と判断したからだ。四月に入ったとはいえ夜はまだ肌寒く、寒さを紛らわすためにも早く寝た方が賢明だとそれぞれが判断した結果だった。
だが、江田の部屋についている西側の窓は、彼の就寝を妨げていた。外で降りだした雨が、大理石製の小屋に激しく打ち付けて激しく音を立てていたからだ。
江田は何とか寝ようと試みていたがなかなか寝付けず、結局外からの音が止んだ午前四時ごろにやっと睡眠にありつくこととなった。

翌朝一番に起床したのは、二階の一番奥に部屋がある小沢だった。昨日は我慢していた煙草だったが、禁煙は結局一日しか続かず、ジッポーと煙草を持ち一階へと降りる。ベランダがなかったので、外へ出て吸おうと考えたからだ。

靴を履き、ドアを開錠して外へ出る。するとそこには、昨日まできれいに咲いていたソメイヨシノの変わり果てた姿があった。花は落ち、その幹から生気は奪い取られていた。

何事かと思った小沢は、一度里中に報告しようかと再びドアに手をかけた。だが、彼がドアに触れる直前に確認した西の方角には、昨日まであったはずの真っ白な小屋がなかった。彼はそれを信じられず、小屋が建っていたところまで駆け寄ったが、そこには真っ白で平坦な岩盤があるだけだった。

いったん落ち着こうと、小沢はその場で煙草に火をつけようとジッポーを取り出す。一本ケースから出した煙草にジッポーを近づける。

だが、ジッポーはなかなか点火せず何度もトライしてもやはり火はつかない。

諦めてその場を離れようとした小沢だったが、しばらく平らになった白い岩盤の上にいると意識が少しずつ遠くなるような気がしていた。その場でふらついて手を突こうとした時、窓から外の様子を見ていた里中が姿を現した。

里中は手に小型の酸素ボンベを持って小沢のもとに駆け寄り、彼を抱えて宿泊用施設へと担ぎ入れる。小沢の意識がはっきりしたところで里中は二階へと上がり江田と安本の様子を確認する。二人はすでに起きており、慌てて駆け上がってきた里中に、何事か、と尋ねた。それに里中は、窓を開けないよう、そして一階へと降りてくるように指示し、再び一階へと降りた。

一階へと降りた江田、安本は、小沢から先程の出来事を聞き、原因を探ろうと外へ行こうとしたが、里中に止められた。

渋々それを了承した二人は、大広間のイスに座り、体を動かせない分、思考を巡らした。

読者への挑発状、あるいは挑戦状

さて、今から江田、安本の二人によって

・ソメイヨシノが何故変わり果てたか

・小屋が何故消滅したか

という二点の謎が解かれる。ここまで物語を進まれた読者はこの二点に関し、論理的な解を示すことが、ある一点の不足した化学的なピースを加えることで可能である。

不足した一つのピースについても物語中でヒントを残したつもりではあるが、完全にフェアであるとはいえないかもしれない。

その点においてこの物語はある種の化学の問題ともいえる。

しかし、この物語を読む全ての読者が、この物語中の記述に一切の誤りがないことを念頭に置くことで二人の導く論理的な解にたどり着くことを祈り、物語を再開する。

会話の口火を切ったのは、江田だった。
「俺は、四時頃まで外の雨がうるさくて全然寝られなかったんだが、おそらくその時点で、小屋は無くなっていたんだろう。小屋に響いていた雨音で寝られなかったから、その点は確かだ」
それに安本が続く。
「あの小屋が無くなるってことは、ありえへんことやろ、里中さん？」
振られた話に
「もちろん。昨日言ったように、ここまで重機は上がってこられないし、人力で切り出すようなことも出来ない。ヘリコプターで空中散歩なんて夢のまた夢だ」
と里中は答える。その返答に安本は
「それでも、無くなってるもんは現に無くなってるんやからな。それに、周りのソメイヨシノが枯れとったんやろ？」
と言った。小沢は
「あれはただ雨が降ったような状況じゃなかったよ。花はもちろん落ちていたけど、木の生気が感じられなかったんだから」
と返答するが、安本に
「それはさっき聞いたわ。それで、ジッポーが付かんくて、意識失いかけて里中さんに助けてもらって、忙しい朝やな」
と言われ黙り込んだ。
話を戻すぞ、と江田が話に入る。
「外灯がなかったから、昨日の七時過ぎから窓の外は見えなかった。つまり、そこから今朝小沢が外に出るまでに、ソメイヨシノが枯れ、今朝の四時ぐらいには小屋が消えた。このことから考えられることは――」
言いかけた江田の答えを、安本が被せ気味に言う。
「ソメイヨシノと小屋は、強酸環境下に長時間さらされとったってことや。それも、かなり強い液体がこのあたり一帯に降り注いでたとみるべきやな」
里中はそれに反論する。
「とすれば、今いる二階建ての建物が消滅していないことの説明がつかないだろう。あの小屋が無くなって、この建物が残っているということの説明がつかない」
「そいつがついてまうんよ、里中さん」
そう言って安本は続ける。
「この建物の屋根は、ジュラルミンで出来てるんやろ？　ジュラルミンはアルミニウムを主体とする合金や。そんで、アルミニウムと、強酸の反応といえば真っ先に思い付くんが不動態の形成やろう。
この辺りは常に無風状態で、ソメイヨシノも長持ちするんやろ？　そんな状況で降る雨は、間違いなく空から地面に対して垂直に落ちてくる。となれば、ジュラルミン製の屋根は初め雨に触れたところから酸化して、被膜をつくる。
そうなったら、いくら強酸環境下にあろうがそれ以上の反応は進行しいひん。
それが、こっちの建物が残って、向こうの小屋が無くなった理由や」
江田が安本に続く。
「そして、ここ一体に降り注いだ雨が、何故強酸環境下ももたらしたかを考えれば、昨夜の化学工場から聞こえたサイレンが答えになる。恐らく、空気よりも軽く、強酸の気体が酸性雨を生み出したんだろう。状況から見れば、塩化水素なんかだろう。
大理石と炭酸カルシウムはイコールだから、塩化水素が雨に溶けて塩酸となったものと反応する。反応で出来る気体は、二酸化炭素だ。
あの小屋は中央部分が一番高いつくりになっていた。だから、雨はきれいに外側へと広がって、小屋を溶かすことになったんだろう。
更に、風の吹かないこの辺りでは、気体の入れ替わりが遅いんだろう。空気よりも若干重い二酸化炭素はこの一帯に残ったまま朝となった。
それに気が付かず、小屋が溶けた後の岩盤の上で小沢は火をつけようとしたが、つかなかった。当然だろうね、酸素がなかったんだから。そして、酸素がない場所にいた小沢は酸欠となった。里中さんは昨日の化学工場のサイレンから酸素ボンベを持って外に出たんだろうけど、結果オーライとなった」
そんなことだからしばらくは部屋の中にいた方がいいだろうね、と江田と安本は二階の自室へと戻る。残りの二人もエアコンをつけないまま自室に引き上げることになった。四人が山を下りたのは、結局予定より五時間後、エンジンがかかる量の酸素が山頂に戻ってからだった。

了

さて、物語は無事に解決を迎えたようだが、この小説には決定的な化学的瑕疵が発見されている。作者としては傑作選に選ばれているものに瑕疵があってもいいのかとこれを選んだ人に聞きたいが、選ばれちゃったのだからどこがどう間違っているのかを説明するのが、作者としての責務であろう。果たして、この小説を読んでいる最中にこの瑕疵に気が付いた者はいたのか、いたとすれば、素晴らしい化学的才能を持っているといえると思う。

それでは早速、文系には懐かしいであろう、化学式の登場である。

CaCO3+2HCl→CaCl2+CO2+H2O

というのが、今回作者が小説内で想定していた化学変化である。既に反応後の化合物に固体が出てきてしまっているが、今後その問題はとてつもない手法で解決されるのでここでは無視する。

CaCO3 の分子量 100g/mol と密度 2.7g/cm^3、HCl の分子量 36.5g/mol と密度 1.18g/cm^3 とし、作品中で溶解した大理石の体積を 200m3 とすると、この大理石は 5.4×10^5mol 存在しているということになる。

塩化水素はこの大理石との反応で、2 当量必要(ざっくり言うと 2 倍)なので、先程の値から計算すると 4.0×10^8g 必要となる。

密度やら単位換算なども全部済ませると、溶解に必要な塩化水素の総量は 340m^3 となる。

これらが雨として降った時、全てが効率よく反応するわけがないので、5%が実際に反応した量だとすると、6800m^3 の酸性雨が降ったことになる。ああ、ここでおおよその結論は見えてきただろうか？

大理石の小屋の底面積を 50m^2 とした時、降った雨の高さは 136m、作品中ではこれが 5 時間で降っているので、何と時間当たりの雨量では 27000mm/h の雨が降り注いでいることになる。ゲリラ豪雨でも 150mm/h 降れば記録的短時間大雨情報が出るだろうから、まさに桁違いな大雨が降ってしまっているのである。

さて、ここまでは自然のやったことだからと作者も逃げることが出来るのだが、棚上げにしていた問題はそうもいかないのである。反応後に、固体が発生している点だ。

これも水に溶けてくれればいいのだが、溶けた大理石の量が多すぎて全く溶けきらないことが計算から証明されてしまった作者は、反応熱で溶かそうとしてしまったのである。これがとてつもないこととなってしまうとも露知らず。

始めに書いた反応式での反応熱は 794.90kJ/mol である。よって、総熱量としては先程計算しておいた mol の値から 4.3×10^9kJ/mol という値が出てくる。

CaCl2 の比熱を 450kJ/gK とし、分子量が 110.98g/mol であることから、計算を進めると、発生した総熱量は 86000K となる。えっまじで。となるってさらっと書いたが、要するに約 86000℃である。これがどのくらいの温度かというと、太陽の表面温度の 10 倍である。間違いなく、山ごと溶けてなくなってしまうのである。

よって、固体の生成反応なんて全く考慮しなくてもいいのだが、恐らくこの温度で生きている人間はいないであろうから、この物語は成立しているようで成立していないのである。

ということで、傑作選のために書いた化学的補足を終了する。ああ、なんかゴメンナサイ。

冷たい夏

望月佳司

1

「あっつ～」
太郎はTシャツの襟をパタパタさせながらぼやく。
気温は三十五度。溶けそうだ。
「まーいいじゃない。今から涼しいとこに行くんだし」
花子はそう言ってぶつくさ言う太郎を宥める。良妻だ。
今彼らは空港の外の喫煙所にいる。彼らは一時間後日本を発つ飛行機に乗ってオーストラリアまで旅立つ予定だ。
たばこすぱすぱ。
彼らは喫煙所を出て国際線へと向かう。その途中、ふと変な男を見た。
「おい、花子。あれ見てみ」
「なに？　……あら、なんて暑そうな格好」
彼らの目の先には黒いロングコートを着た男がいた。膝辺りまである長いコートをはためかせ、彼らとは反対方向を歩いていく。
「あんなの見てるだけで暑くなってくる。本当に勘弁してくれい……」
また太郎が襟をパタパタしながらぶつくさ言う。
「まあまあ、なんであの人があんな恰好をしているのか考えてれば、きっと涼しくなるわよ」
「……確かに、なんでこんな暑い日にあんな暑苦しい格好してるんだろ？」
別にサングラスや帽子を被っていたわけではないから、マフィア的な存在とは考えにくい。(そんな分かりやすいマフィアなんて多分いないだろうが)単なる防寒として着ているといった感じだった。
二人して熟考し、先に答えを出したのは花子だった。
「ふっふ……どうやら私を愚妻呼ばわりするにはまだ百年早いようね……。さて、私の完璧な推理をお披露目して差し上げようじゃないの！」
太郎の悔しげな顔をよそに、花子はしたり顔で自分の推理を披露する。
「簡単に言えば、彼と私たちの状況は同じってことなの」
「簡単に言うなよ！　さっぱり意味が分からんぞ」
「全く、分からず屋ねぇ……。いい？　今から私たちはこの格好でオーストラリアまで行くわけよね？　そして、空港から外に出た時、やっとその国の寒さを実感する。空港内は空調で大体一定の温度で保たれてるからね。で、そこで私たちは初めて何か羽織ろうする。それこそ黒のロングコートとか」
「つまり、コートを着ていた彼は寒い国から来た人で、出発地の気温に合わせた服装のまま日本に来てここを歩いて行ったってこと？」
「その通り。だから、多分空港を出た瞬間すぐさま脱ぎ捨てると思うわ」
花子の自信満々な推理に太郎は思いっきり肩をすくめた。
「……やれやれ、やっぱりお前は愚妻のようだ」
「なんですって！？」
「だってそうだろ？　彼が乗ってきた飛行機は時間的にＪＬ０８１便。こいつは上海から来る飛行機なんだぜ」

2

お店に「冷やし中華はじめました」という紙が貼ってあった。それを目にするたび、私はついため息が漏れてしまう。
私は冷やし中華はじめましたという言葉が嫌いだ。どれくらいかというと、スタバデビューという言葉くらい嫌いだ。
そこまで大々的にはじめましたと銘打っているのに、出てくるのは普通に家庭的な味の美味しい冷やし中華である。その竜頭蛇尾な感じにアレルギー反応が出る。例えば、ファミレスのメニューの写真と実物とで、明らかに実物がしょぼいとガッカリする人もいるだろう。それに近い感覚だ。
そんな紙貼るくらいならもっとこちらを驚かせるようなことをやってみろというのが私の率直な考えなのだ。
しかし、私自身冷やし中華は好きで、こういう紙を見るとつい頼んでしまう。もしかすると、とんでもない「冷やし中華」が来るのではないかという淡い期待を抱いてしまうからだ。
私はその店に入り、凝りもせず「冷やし中華」を注文した。

3

ある一人の男が中国北東部にそびえる白頭山の火口付近にいた。
白頭山は中国と北朝鮮の国境に位置し、中国では珍しい活火山である。

もし噴火が起きれば、それは中国一帯の気候変動を引き起こすほど強力なものになると言われているが、ここ何百年も噴火は起きていない。いつ噴火してもおかしくないが、なんとか一歩手前で踏み止まっているというのがここ最近の現状である。
男はしばらくその周りをくるくる歩いた後、意を決したように自分が背負っていたリュックサックを火口に放り投げ、一目散に走り去っていった。
と、その時、激しい爆発音が鳴った。
何かが爆発したのである。さっきの男が投げ入れたリュックサックの中に何らかの爆発物が入っていたのだろう。
すると、その数分後それまで以上に大きな轟音が鳴り響き、勢いよく火山ガスが火口から噴き出てきた。今まで塞がれていた火口が爆発によって開き、今まで穏やかだった活火山が噴火を起こしたのである。
この噴火は近年で最大の噴火となり、周辺諸国に大きな影響を及ぼした。

4

「……でも、今年の中国ってすっごい冷夏なんじゃなかったっけ？」
「え、そうだったか？」
「うん、前に起こった活火山噴火のせいで、気候変動が起こって今年は雨ばっかりらしいの。それのせいで今年の中国は記録的冷夏なんだって。朝とかはコート羽織っても良いくらいの冷え込みらしいわよ」
「じゃあやっぱりさっきのコートの男は……」
「そういうこと。つまり、私の推理が当たっていたってわけ。てことで、あっちで何かおごってよね」
「えー、参ったなぁ……」
太郎は漫画でしか聞いたことない「トホホ」という声を漏らした。

5

私が「冷やし中華」を頼んでから三十分。待つ時間が長くなればなるほど、私の期待は上がっていく。さて、どんな冷やし中華がやってくるのだろうか？
すると、店員がぱんぱんになったリュックサックを背負って店を出ていった。
……おかしい、この店には店員は一人しかいなかったはずだが。
その後、その店員が帰ってくることはなく、当然私の期待していた冷やし中華も来ることは無かった。
途中で外へ出かけるなんて何という店員だ。二度とこんな店来るものか。
私は抑えきれない怒りを抱えながら店を出た。

後日、手紙が届いた。
そこには「冷やし中華遂行しました」と書かれていた。

作者コメント

『固ゆで卵は手を汚さない』保良吹世
十分でできる毒殺クッキングいかがでしょうか。科学への無知がチラリズムする拙作ですが、傑作選に掲載して頂くという名誉に恵まれた運の良い作品だと思います。嬉しいなぁ。
読んでくださって本当にありがとうございました。

『死が二人を分かつまで』森煮豆仁
雷鳴の中でも、赤い鎧戸のかげで、貴婦人として死す。

『G船上の犬たち』八場置氏
口の回らぬ外郎売。
二年半ぶりのかくれおん傑作選ですね。
自立できない程度には骨が付いてなかったものをプロットの骨だけはつけたものとなります。
ではではよしなに。

『鹿野師実のアンフェアなランチタイム』小浜百
2012年度以来となる傑作選に、自分の作品を選んでいただけたこと、とても嬉しく思っています。ありがとうございます。一生分の運を使い果たした気分です。この作品は、キャラ萌え小説として書きました。楽しかったです！！

『霧消する小屋』蒼田雅翠
傑作選に選ばれて嬉しいのは嬉しいのであるが、実際問題、作品中の化学的瑕疵を考えると、作者としては何とも言えない、複雑な感じである。

ともあれ、この下らない作品を選んでくれた人には感謝を述べたい。大いにこの、『化学的バカミス』を読んでいただき、選んでいただき、ありがとうございました！

『冷たい夏』望月佳司
まさか自分のこの作品が傑作選に選ばれるとは夢にも思いませんでした。選んでくださった方々に深く感謝いたします。現実的ではない部分が色々とありますが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

発行　同志社ミステリ研究会
編集　望月佳司
ホームページ　http://dms.zatunen.com/
ＢＯＸ　新町学生会館 332　京田辺別館 223

表紙素材先　http://topcruz.blog.fc2.com/blog-entry-725.html